魔法少女リリカルなのは～過去に縛られし少女～

高風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜過去に縛られし少女〜

【Nコード】

N32130

【作者名】

高凧

【あらすじ】

オリキャラの少女が主人公。

彼女には失われた記憶がある。

それがどれほど重大な意味を持っているか彼女は知らない。

もしも彼女がそれを思いだしてしまったとき、どんな結末を迎えてしまうのだろうか？

魔法少女リリカルなのは〜過去に縛られし少女〜
始まります。

まず初めに（前書き）

簡単な設定の説明です。

まず初めに

オリキャラ設定

名前

リリス・フェイラーゼ

年齢

14歳

性格

少し無口だけど、根は優しい。（自分のデバイスだけは例外でよく話す）

デバイス

銀色のひし形の宝石。名前はエターナルパルス。形状は杖だけど、剣に変化されることもできる。

戦闘スタイル

基本は杖を使つての遠距離からの攻撃。ただし、接近された場合デバイスを変化させて剣を使つての接近戦もできる。だが、接近戦はあまり得意じゃない。

時間設定

A・S 終了から五年後

注意書き

キャラの階級は基本は書きません。

原作キャラの性格などは基本的に変えたりしません。

初心者のため、キャラの話し方が変わったたりするかもしれませんが、ご了承ください。

プロローグ(前書き)

初っ端から少しくらいです。

プロローグ

お前は救われない。

生きてはいけない人間だ。

誰もお前の存在など認めていない。

頭の中に声が響く。

「そんなこと、ない」

ただそう返すだけで精いっぱいだ。

強がるな、お前も気付いているはずだ。

「なにに………？」

自分は幸せなど得てはならないと。

「それは、違う。私は………」

違う。

なぜならお前は、罪人なのだからな。

「違う！………！」

私は寢床から飛び起きた。どうやら、夢を見ていたようだ。

「どうして、あんな夢を……」

一人静かにつぶやいた。その時、部屋の扉が勢いよく開いた。

「どうしたの！？ 大声がきこえたけど」

そこにいたのは、心配そうな表情をした一人の少女だった。

どうやら部屋の外にいた彼女に聞こえるぐらいの声を出してしまっ
たらしい。

「大丈夫。なんでもない」

私は目の前の少女にただそれだけの言葉を返した。

「本当に、大丈夫？」

「うん。心配いらない」

その言い分にまだ納得はしきれてはいない様子だったが、彼女はそ
れ以上は追及はしてこなかった。

「じゃあ、私は戻るね。でも、何かあったら遠慮なく言ってね。そ
れじゃ、おやすみ。リリースちゃん」

「おやすみ。なのは」

この会話を最後に、なのはは部屋から出て行った。

再び私は寢床についた。

けれど、さっきの夢が頭から離れない。

考えないようにすればするほど、逆に意識してしまう。

眠れない、ねむれない、ネムレナイ。

「どうすれば、いいの？」

当然この場には自分以外に誰もいない以上、その問いに答えてくれる者はいない。

ただ私の声が部屋に響くだけだった……

プロローグ（後書き）

とりあえず、プロローグを投稿しました。

あと、これからのことなのですが、自分はまだいま受験生なので、投稿するのがかなり遅れたりすることがあるかもしれませんが、納得していただけると助かります。

また、感想などがありましたら、ぜひいただけると嬉しいです。

第一話（前書き）

最初の設定のページで書き忘れていた注意書きがあったので、ここでお伝えします。

注意書きの追加

『 エターナルパルスの台詞。（日本語で全部書きます）

（ ） オリキャラの心の声。

性格の紹介で無口というのがありましたが、心の声は実際に話しているわけではありませんので関係ありません、勘違いをしないようお願いを付けてください。

原作のデバイスの台詞は基本はだしません。

第一話

いつもみたいにお願い、エターナルパルス」

『はい。マイマスター』

早朝の広場に私たちの声がある。

『それでは、スタート』

その声を合図に複数の銀色の魔力弾を浮かべ、用意していた的に当たっていく。

『右後方の魔力弾にもう少し意識を向けてください』

言われた通りに意識を向けるが、いまいち加減がまだわからない。

『それではやり過ぎです。他のものが雑な動きになってしまいました』

案の定、注意をうけてしまった。

私が今やっているのは魔法の特訓だ。この頃は毎朝やっている。

何故こんなことをしているのかというと、魔法を使うということに対する経験が不足しているからだ。

私は時空管理局というものに所属している。そこでは、犯罪などを

止めるためにやむなく魔法を使うこともある。

つまり、そこに所属している以上、魔法を使いこなすことは絶対条件。早いうちに経験不足を補なわなければならないのだ。

そんな理由から私はこんな特訓を始めた。

『マスター、徐々に的から外れてきています』

少し時間が経ってきた頃、魔力弾は的にはなんとか当たってはいるが、確かに外れてきていた。

(もっと、集中しないと……)

だが、そうやって意識し始めると逆に焦りが出て、さらに逆効果になってしまった。

正確に当てることもできなくなり速度も遅くなってしまった。

『……マスター、ここまでにしましょう』

エターナルパルスに止められ、今日の特訓はこれで終わりにすることにした。

とてもじゃないが今日の内容は良かったとは決していえない。少し前の頃のほうがまだ良かった。

「どうして、こうもうまくいかないんだろ？」

『何か悩み事でもあるのでは？ それが無意識のうちに気になってしまい、動きが悪くなっているという可能性もあると思いますが…』

……悩み事とまではいれないが、気になっていることはある。

数日前にみた夢のことだ。

妙に現実味があった気がした。

(でも、本当にどうしてここまで気になるのだろうか？ 今まで夢なんていくらでもみてきたのに。そもそも私が大罪人ってどういうこと？)

いくら考えてもどうしてここまで気になっているのか答えは出なかった。だから気になり始めたころから考えないようにしていたが、どうしても頭から離れなかった。

(これじゃ、本当に悩んでるみたい)

『マスター、どうしたのですか？』

「えっ?」

『やはり何か悩み事があるのですか?』

「……悩んでいるように見える?」

『はい。もしよければ話してもらえませんか？ 何かアドバイスが

できるかもしれませんが」

私は話すべきどうか少し悩んだ。

正直こんなことを話しても、ただ余計な心配をかけるだけかもしれない。

けれど……

(話して少しでも気が楽になるなら無駄じゃない)

『マスター?』

「……話すから、聞いてくれる」

『はい、もちろんです!』

「実は……」

『なるほど。そういうことでしたか……』

「どう思っ?」

『心配する必要はないと思います。普通ならそう言ってしまいますが、マスターがそこまでその夢だけが気になるのなら、もしかしたら何かあるのかもしれませんが。その何かまではわかりませんが……』

「そう。わかった」

『お力になれず、すみません……』

「気にしないで。それより、話を聞いてくれてありがとう」

『いえ。それではそろそろ戻りましょうか？』

「うん」

結局、何も解決はしなかったが、幾分は気が楽になった。

そうして私たちは、管理局の宿舎へと戻って行った……

第一話（後書き）

最初に報告しますが、あらすじと最初の設定のページを少し編集しました。

第一話をなんとか投稿できましたが、眠い中書いたので文がおかしいかもしれません。
変だと思ったところがありましたら、教えていただけると助かります

第二話（前書き）

この話から原作キャラ達が本格的に出始めます。

第二話

「それにしても、訓練場に来てってどういうことだろう?」

『とりあえず行ってみなくては何もわかりませんね』

私達はとある理由から、訓練場へと向かっていた。

その理由とは少し前にある人から言われたことによるものだった。

私達が宿舎に戻って、少し休んでいるときのことだった。

部屋がノックされ、とある女性が扉越しから話しかけてきた。

「リリースちゃん。用事があるんだけど、大丈夫かな?」

それはなのはの声だった。

「なに、なのは?」

「今すぐ訓練場に来てもらえる?」

「……どうして?」

「詳しいことは向こうで話すよ。それじゃ、待ってるね」

「な、なのは?」

私は急いで部屋の外に出ると、もうなのははいなかった。

「唐突すぎる……」

『確かにいつもの彼女とは違う感じでしたが……』

「……しょうがない。行こうか？」

『はい。マスター』

こんなやりとりがあり、私たちは訓練場へと向かっているのだった。

「……でも本当に、なのはは何を考えているんだろう？」

『何かしら理由はあると思いますが……』

彼女、高町たかまちなのはという少女は一方的に相手に話すことはまずない。

それだけになのはあの態度には私も少し驚いたのだった。

そんなことを考えたり会話したりするうちに私達は訓練場についた。

しかしそこに待っていたのは、なのはだけではなかった。

「おっ、来てくれたみたいやな。待つとったよ」

「ごめん、リリース。急に呼び出して」

私に声をかけたのは二人の少女によるものだった。

最初に話しかけた独特の口調の少女は、八神^{やがみ}はやて。

次に私を心配するように話しかけたのは、フェイト・T・ハラオウ^{テストロッサ}ン。

どちらもなのは友達であり、私にとっても仲がいい二人だ。

だが、二人が何故ここにいるのだろうか？

「ヴィータちゃんやシグナムさんは？」

「あの二人やったら、少し用事があつて来れないみたいや」

「なのは、はやて。それよりまず先に、リリスに色々と説明しないと」

「そうやったな。じゃあ、まずここに読んだ理由やけど、なのはちゃんと模擬戦をしてもらうためや」

「……どうして、模擬戦？」

「新しく作る新部隊に、リリスちゃんも誘おうと思つてな」

「新部隊？」

「ある事件の捜査を私が受け持ったことは知ってるやろ？」

「知ってるけど、それが？」

「実はその事件の捜査に、今の新人たちで構成された新部隊を使
って、みんなに経験を積ませようと思ったんよ」

「……そういうこと」

はやての考えていることがようやく理解できた。

確かに私を含めて今の新人たちは、全員がほとんど事件に対しての
経験がない。

事件が起きたときどのような行動をすればいいのかという知識はあ
るが、知識があっても経験がない。

それではいざという時に、思うように動けないかもしれない。

だからこそ、そんなことにならないように、経験を積ませておこう
とはやては考えたのだろう。しかし……

「事情は理解したけど、模擬戦をする理由はない……」

「理由ならあるよ」

今話を聞いただけでは、模擬戦をする理由はないと思ったが、は
やては間延びした声で答えた。

「その新部隊の隊長はなのはちゃんとかに任せるつもりやけど、副
隊長をリリースちゃんに思ってるんよ」

「えっ？」

「それでな、今のリリースちゃんはどこまで戦闘の中で正確に分析でき、どこまで正確に自分の動きを把握しながらデバイスに指示をできるか知りたいんよ」

「……どうして？」

「そういった才能は、副隊長みたいな誰かを引っ張っていく立場の人間にも必要なんや」

「そういう意味じゃない。どうして、私が、副隊長なんて……」

経験もなければ人望もあるとはいえない。

そんな私が、誰かを指揮する立場にもなる副隊長なんて正直なところ無理だ。

そんなことわかっているはずなのに、はやては何を考えているのだろうか？

そもそも私にそんな才能はないのに……

「リリース、自分には副隊長なんて無理だって考えてる？　なら、それは間違いだよ」

「フェイト？」

フェイトまで何をいつてるのだろう？

私には絶対に無理だって、どうしてそう思わないだろう？

「……以前の集団での模擬戦のこと覚えてる？」

「覚えてる……」

「あの時、貴方は他のみんなに、どうすればいいのか正確に素早く指示していた。それも初めての模擬戦だったのに」

「だけど、あれは……」

はやてが私にあるはずがない能力を持っていると言っていた理由がわかった。

確かに私は他の人に指示をしていた。だけどそれは全部、私が考えたものではなくエターナルパルスに言われていたことなのだ。

私はただそれを他の人に伝えていただけ。

「あれを見た人なら誰だって、リリースにそういう資質があるってことはわかるはずだよ」

「……でも」

あれは、エターナルパルスが言ったことだから。

私の言葉はそう続くはずだったが、途中で詰まってしまった。

それを見ていたなのはが心配そうに声をかけてきてくれた。

「リリースちゃん、無理はしなくていいんだよ」

「なのは……」

「私は本当のことを言うと、リリースちゃんにはどんな事件にもあまり関わってほしくないの」

「……どうして？」

「心配だからだよ」

「……」

私は、はやてやフェイトに期待されるほど優秀ではない。

二人が言っていた才能だって、本来は私のものではなく、私のデバイスのものだ。

だから、私がそんな立場になっても、私は何もできない。

だったら新部隊の話も断ればいいだけだ。

そうすれば事件には関わらない。なのはに心配もかけない。

いいことだらけの、はずなのに……

(このままで、いいの？ 自分に自信をもてないままでいいの？)

「リリースちゃん。どうやる？」

「少し、考えさせて……」

それがとりあえず私がだした結論だ。

とにかく今は時間がほしい。

「まあ、いきなりやったからな。ゆっくり考えてな、リリースちゃん」

「焦る必要はないからね、リリース」

はやてとフェイトはそう言つと、私に別れを言って戻って行った。

なのはだけこの場に残っていた。

何か声をかけるべきか悩んでいると……

「リリースちゃん、後悔しないでね」

なのはが先に声をかけてきた。

「後悔つて、なにに？」

「自分が出した答えにだよ」

「わかつてる……」

「それならいいよ。あと、さっきは何も説明しないで唐突に呼び出してごめんね」

「いつもののはらしくなかった……」

「にゃはは、やっぱりそうだった？」

「どうして？」

「心配だったの。リリースちゃんがもし安易に考えて答えを出したらどうしようって。そうしたら、少し一方的に焦るように話しちゃって」

「……ありがとう、なのは」

「ほえ？」

「それだけ、私のことを気にしてくれて」

「あっ、どういたしまして」

「私、真剣に考えてみる」

「うん、それがいいよ。じゃあ、私も戻るね」

なのははそう言って、戻って行った。

「私たちも戻るうか？」

『そうですね、マスター』

そうして私たちも自分に部屋に戻って行った……

第二話（後書き）

ずいぶんと投稿が遅れて本当にすみませんでした。

定期試験があつたり、風邪をひいて寝込んだりとなかなか時間が取れなかつたもので……

投稿するペースはもう少し早くしていきたいと考えています。

あと、これは毎言っている気もしますが、感想や文の表現などがおかしいところがありましたら、遠慮なく教えてください。

第三話

「どつするべき、なんだろう……?」

部屋に戻ってきた私の第一声は弱々しかった。

それに答えてくれたのは私の愛機デバイスだった。

『マスターは、何に対して悩んでいるのですか?』

「……………」

その問いに答えなかった。言わなくとも理解しているはずだと思っただからだ。

私は声を無視し、先ほどの話について考え始めた。

なのはたちの話を聞いた私は、少し戸惑いとまじこそしたが確かにうれしいと感じた。

自分が必要とされていると思ったからだ。

さらに経験を積むこともできる。

まさにいいことばかりだと思っていた。

……模擬戦の意味を知るまでは。

意味を知った時、自分が考えているほどいいことばかりではないことに気付いた。

彼女たちは私のことを誤解していたのだ。

それは私にあるはずのない判断力に優^{すぐ}れているという才能を持っていると思っ^てていること。

その結果、私が副隊長などといった立場でも充^ち分にやっ^ていけるだろうと考えていることだった。

……結局のところ悩んでいる理由はその誤解が問題なのだ。

私がこの話を受けてしまえば、彼女たちは少なからず私に指^{さし}揮をとらせようとするだろう。

今回の話は新人たちに経験を積ませようとする為のものなのだから当然だ。

しかしそれは無理なのだ。

あるはずのない才能をいかせと言われているようなものなのだから。

「やっぱり断るべきかな……」

今回のような機会ならこれから先にいくらかでもあるはず。

何もこれが最後になるわけではない。

私の諦めに近い一言にはこんな思いも含まれていた。

それを聞いていた私の愛機は、ただ冷静れいせいに話しかけてきた。

『最後にどのような決断を下されるかはマスター次第です。ですが一つだけ質問をしてもよろしいですか？』

「いいよ」

『マスターは何故、悩んでいるのですか？』

………どんなことを聞かれるのかと思えば、さっきと同じようなことだった。

言わずともわかっているはずなのに、どうしてわざわざ私から聞くとするのかは不思議だった。

だが、いいよと返事をしたのだから、とりあえず答えてあげることにした。

「………誤解されていたからだよ」

簡潔かんけつに言ってしまったが、これで十分理解してくれるだろうと思っ
た。だが

『いえ、それでは質問の答えにはなっていません』

返ってきたのは予想外なものだった。

「どじりっしょっ。」

『今の答えでは、現状を認識したということしか私には伝わりません。……ここまで言えばマスターならわかるはずです。質問の意味が』

「……うん。そこまで言われてやっとわかった」

つまり私は、質問の意味を間違えてとらえていたのだ。

私は誤解されいたからと答えてしまっていた。

だが、そういう意味じゃない。

その誤解されていたという現状を私は、どのように感じたのかをこの子は聞きたがっていたのだろう。

『では、改めてお聞きします。マスターは何故、悩んでいるのですか？』

今度は意味を間違えないように答えた。

「自信がないから。あと、怖いからだよ」

……自分で言うておいて少し情けないかなと思う。

私は自分にあまり自信がもつことができない。

だから今回のように、長々と悩みを抱くようなことになるのだろう。

そんなことを考えながら、私は何を言われるのかただ待った。

あまり良い返事がもらえらると思っていなかった。

『マスター。貴女は一つだけ勘違いかんちがをしています』

だからこれは私にとって以外だった。

『マスターは彼女たちが言っていたような才能はないと思っているようですが、もし本当にそうならば私があの場合でお断りしてしました』

「えっ？」

『……その反応を見る限り、本当にお気づきでないようですね？』

「気づくも何も、だって私は……」

『信じてもらえないのであれば、他の人たちにも聞いてみたらいかがですか？』

「……他の人に聞いたところで、あの模擬戦をみていたら答えは決まっていると思う」

『はい。ですからあの模擬戦を見ていなかったとしたらどうなのか、という過程かていのもとでお聞きすればいいと思います』

それは気づかなかった、というのが今の私の気持ちだ。

確かにそれなら、今までの私自身が判断されるわけだから、悪くないと思う。

ただ一つだけ不安がある。

「もしそれで、私には向いてないと思われていたらどうしよう……」

『その心配はありません。私が保証します』

「……わかった。他の人に聞いてみる」

不確定なことは言わないこの子がここまで言うのだから、それだけ私のことを評価してくれているのだろう。

それは純粹じゆんすいに嬉しいうれと思う。だから私もこれ以上は何も言わないことにした。

『では早速ですが、お聞きに行きますか』

「うん、そうだね」

そう言って私が腰かけていた寢床ねこから立ち上がった時だった。

突然部屋のドアがノックされた。

「誰？」

「私だ。入るぞ」

そう言って入ってきたのは、意外な女性むすめだった。

「シグナムさん？　どうかしましたか？」

「どうかしたかではない。時間はとっくに過ぎているぞ」

目の前にいるのは、はやての守護騎士。ヴォルケンリッターの一人、シグナムさんだった。

だが、どうしてここに来たのだろうか。

(時間が過ぎていってどういっ……………あっ)

そこで私は気づいた。

確か今日は、シグナムさんに剣の稽古をつけてもらう約束だったのだ。

時間はもう一時間近くが過ぎようとしていた。

「まさか、忘れていたのか？」

呆れたような口調だった。
あき

「すつ、すみません。すぐに行きます」

私はすぐに準備を始めた。といっても訓練用の剣を用意するだけなのだが、無駄に焦ってしまった。

「それにしても、お前が約束を忘れるなんてめずらしい。何かあったのか？」

「……はい、ありがとうございました」

この期こに及およんで嘘うそを言うのもどうかと思い、何かがあったことだけが正直に言った。

シグナムさんもただ、そうかとだけ言うだけでそれ以上は何も聞いてはこなかった。

「準備ができたなら行くぞ」

「はい。あと稽古が終わった後、一つだけ聞きたいことがあります」

「了解した。終わったあと聞こう」

「……ありがとうございます」

私たち二人はそれ以上の会話をすることもなく、屋内おくないの訓練場へと向かった……

第三話（後書き）

最初に言っておくことがあります。
本当にすみませんでした！！！！

投稿するペースを速くするとか言っておきながら、結局おそくなっ
てしまいました。

それでも読んでくださった方には心からお礼を申し上げます。

ありがとうございます！！

それではまた次話を楽しみに待っていてください。

第四話

訓練場についた私たちは、すぐさま稽古を始めることとした。

稽古といっても、剣を使つての戦いになれるための訓練のようなものだ。

何度も繰り返しやれば剣の扱いにも慣れる。

そうすれば魔力を使つての戦闘などでも、新しい戦い方もできるはず。

そう思つて私は稽古をしている。

ちなみに今日は、シグナムさんとの試合形式のような稽古だ。

「よろしく、お願いします」

「ああ、遠慮はいらんどぞ」

互いに軽めの挨拶を交わし、訓練用の剣を構える。

その瞬間、私は飛び出し勢いよく剣をふるつた。

いきなり速攻で攻撃をし、不意をつく作戦だ。

ギンッ！

金属がぶつかり合ったような音が響く。

やはりと言っべきなのか。不意打ちを狙ったはずの私の初太刀は、
いとも簡単に止められてしまった。

動揺している暇などはない。すぐさま次々と攻撃を繰り返す。

シグナムさんはそれらに対し反撃することもなく、ただ避けるか防
いでいた。

(わかってはいたけど、やっぱり一撃すら当たらない……)

そもそも彼女と私とでは、剣を扱うことへの経験が違いすぎる。

そんな私が自分から攻撃を仕掛けても、まともに当てることなどほ
ぼ不可能だろう。

なら私がこの女性ひとに勝つことは無理なのではと思うかもしれないが、
そう決めつけるのはまだ早い。

私には一つだけ、秘策があるのだ。

それを試さないうちに勝てないと諦めることはしたくはない。

私は今はただ何も考えていないかのように攻め続けた。

それに対しやはり彼女は反撃は一切してこない。

(予想通り、動きを観察してる)

この事実により、私のある考えは間違っていないことがわかった。

その時、私はつい安心してしまったのだろう。

「はあっ!！」

彼女の強烈な一撃への反応が遅れてしまった。

「っ!?! うっ」

何とか防いだが攻撃を受け流すことができず衝撃が伝わり腕がわずかに痺れてしまった。

(左腕が少し動かしづらい……)

私にとってこの状況は本来なら好都合のはずなのだ。‘秘策’とは攻撃されている時にこそ使えるものだから。

しかし思ってもいなかった事態が起こり、私は焦るはめになってしまった。

(くっ!。このままじゃ、まずい)

片腕が動かさしづらければ、相手の攻撃への反応は当然遅れることになる。

満身に受け流すことも出来ないし、避けることも防ぐことも難しくなる。

そうなってくれば今の私のように、体力の消耗だって必然的に多くなる。

つまり何もできないまま疲労して終わってしまうなんて結果もあり得る。

(……そんなの、いや)

だがこのまま攻め続けられれば、そう遅くないうちにやられることは必然。

(なら、どうすれば……?)

私がそんな迷いを抱いた、その時だった。

「でやああああ!!」

気合を入れた叫びとともに、重い一撃が私を襲った。だが

(これを、まっけた!)

私はそれを剣で受け止めた。そして、態勢をくずした振りをした。

「これで、終わりだ」

一言だけ呟き彼女はとどめの一撃を振るった。

キーン!

「なに!？」

彼女は動揺している。だがそれも当然だろう。急に、相手の動きが速くなったのだから。

私は相手の剣をはじいたその勢いを利用し、隙を見せている彼女へと剣を振るった。

(これは当たる。勝った……)

私は勝利を確信した。

ヒュッッ!

なのに耳に届いた音は、空を切り裂くような音だった。彼女の姿は目の前にいなかった。

「惜しかったな」

その声は足元から聞こえ、下を向こうとしたその瞬間には喉元に剣が突きつけられた。

「……負けました」

まさかあの状態からすぐさましゃがんで、攻撃をかわすなんて思わなかった。さすがだなと感じた。

「ふっ。何か狙っているのは気づいていたが、あんな方法をとるとはな。最初から狙っていたのか？」

「はい。あれが私の‘秘策’でしたから……」

私が言う‘秘策’とは最初から速さを抑えておき、最後の一瞬だけ自分の本当の速さで決めるといったものだった。

自分が突然早くなったりすれば相手は戸惑うだろうし、うまくいけば隙もみせるかもしれない。

その瞬間を狙えば勝てる可能性もあるはずだと思っていた。

結果は予想とは違うものに終わってしまったのだが……

私はこの‘秘策’とはどういうものなのかを、シグナムさんに細かく話した。すると

「なるほどな。狙いは悪くないだが最後の一撃は褒めてやれんな。何故だかわかるか？」

一つだけ問いかけをされた。

それに対し私は自分の考えを答えた。

「最後、私が油断してしまったから」

「そつだ。勝てるかと確信して詰めが甘くなるのは、自分がまだ未熟だという証拠だ。それを忘れるな」

「……はい」

この女性むすめの言葉には重みがある。だからこそ素直に聞いておくべき

なんだと思う。

「まあいい。これで稽古は終わりだ。戻って休め」

「はい、失礼します」

私が訓練場を出ようとしたその時、代わりに一人の少女と青年が入ってきた。

「なんだよ。もう終わったのかよ」

「……俺は急げと言ったぞ」

「しょうがないだろ。はやての話に付き合ってたんだからよ」

「どうして、ヴィータとザフィーラさんが……?」

この二人はシグナムさんと同じ、はやての守護騎士の二人だ。

だが何故この二人がここに来たのだろうか?

「ヴィータ、ザフィーラ。何か用か?」

「お前らが稽古をしてるって聞いたから見に来たんだよ。もう、終わっちまった見てえだが」

「俺も同じような理由だ」

「ふっ、残念だったな」

「シグナムもあたしたちが来るまでもう少し長引かせるよ」

「……………無茶を言うな」

ヴィータの言葉にシグナムさんは少し呆れているような感じだった。

（ふう。少し疲れた）

『マスター、お疲れ様です』

頭の中に声が響いた。思念通話だ。

（ありがとう。でも勝てなかった……………）

『マスターが彼女に勝つにはまだ無理でしょう。何より経験の差が違いすぎます』

（そうかもしれない。でも少し悔しい）

『負ければ誰でも悔しいものです。だからこそ、次は勝てるように訓練を重ね強くなりましょう』

（そう、だね……………）

確かにその通りだ。負けて悔しいなら強くなって勝てばいい。

何度も訓練して強くなればいいのだ。

それに今日の稽古だって、負けはしたが手応えはあった。

私は確実に強くなってるのだ。

それが確かめられただけでも今日の訓練は無駄ではなかっただろう。

(とりあえず、部屋に戻ろう)

『マスター、お忘れになっただいませんか？』

(何のこと？)

『稽古が終わったあと、話をするのではなかったのですか？』

(……忘れてた)

それだけ稽古のことで頭が一杯だったのだろうか？

『今のうちに聞いておくべきかと思いますが？』

確かに早いうちに聞いておいたほうがいいだろう。

私は守護騎士たちに話しかけた。

「シグナムさん、ヴィータ、ザフィーラさん。話があります」

「ああ、そういえばそうだったな」

「話ってあたしに？」

「俺にもあるのか？」

「はい。実は……」

「ふむ。判断力が……」

「私はそんな才能を持っていないと思っています」

「だけだよ。あたしはあの模擬戦を見てたからそんなことないって
思うけどな」

「さっきも言ったはず。それは見てなかったものとして考えて」

「何故だ？ 俺はそのことがあまり重要だと思わんが？」

「詳しいことは言えません。勝手だとは思いますが、模擬戦はみて
いないもとして考えてもらえませんか？」

「……ああ、了解した」

とりあえず話を聞いてくれた三人は、それ以上深く聞くことはなく
真剣に悩み始めた。

(そのほうが助かる。簡単に結論を出されても困るから)

それから少し時間がたち、一人が呟いた。

「……あたしは、持ってると思っぞ」

「私も同意見だ」

「俺もだ」

「……そう思う理由は？」

「理由は教えられねえ」

「どうして、ヴァイター？」

「てめえ自身が自分には才能なんて持ってないって、決めつけちまってるからだよ」

「それがどう関係してるの？」

「自分にはないって思ってるものを、他人があるって言うても信じられねえもんだ」

「それで？」

「だからてめえは、少しは自分のことをわかってことだよ」

「……意味がわからない」

「ああ、もう！ めんどくせえ！ だからそんな才能があるのかどうかを知りたいきゃ、試せばいいってことだよ！」

「試すってどうやって？」

「少しは自分で考えろ！ いくらでもあんだろっが！ 集団戦の訓練をするとかよー！」

「あつ、そんな方法が……」

そつだ。なにも聞いて回るだけじゃない。

そんな方法だつてあるんだ。

どうしてこんな簡単なことを思いつかなかつたのだろうか？

「はあ。何で頭の回転はええくせに、こついつ時だけにぶいんだよ」

「ごめん……」

「はあ。もういい」

「ご苦労だつたなヴィータ」

「シグナムてめえ！ お前もなんか話せよ！ あとザフィーラも！
何であたしだけがこんな苦労すんだよ……」

「お前が率先して話を進めるからだろ？」

「俺も同じ意見だ」

「ぐっ！ ちくしょう……」

正しいことを言われたからか、ヴィータは二人に何も言い返せなかつた。

そついう私もそのやりとりを見ながらも、これから自分が何をすれ

ば考えていた。

でも、とりあえず

(疲れたから、部屋に戻ろう)

私はここから出ることにした。

「三人ともありがとございました」

「気にするな」

「もうこんなことで悩むんじゃないぞ！」

「俺は何もしていないぞ」

私は例を言って三者三様の答えを聞いたあと、訓練場を後にした。

私はこのまま部屋に戻ることにしたが、ふとある疑問が浮かんだ。

「こんな方法があること知ってた？」

『どつだと思えますか？』

「……こんな時にまで厳しいなんて」

『大きく成長するには自分で悩み考え動き、そして自分自身で答えを出すことも必要なのです』

「……わかった」

そういえば忘れていた。

私のデバイスは主人には厳しいってことを。

今度からは忘れないようにしよう。私は心に誓った……

第四話（後書き）

なんとか前回よりは早く投稿することができました。
まあ、それでも遅いには変わりはないのですが……
とりあえずこれから先もこんなペースになるかもしれないが、楽しみに待っていただけると光栄です。

それでは、また。

第五話

「そんな言い訳が通用するはずないだろ！」

私は自分の部屋の前でとある青年に説教されていた。

稽古を終えて戻ってきた私が、何故こんな状況に陥ったのかという理由は単純だ。

頼まれていた仕事を忘れていたからだ……

朝から色々あったからとさりげなく反論もしてみたが、結果は今のように一蹴されてしまった。

「どんな理由があったにせよ、君は仕事を受け持った。ならばそれを遣り切るのは義務じゃないのか？」

「……すみませんでした」

言い返すことなどできない。全くの正論だから……

「……謝ったということは、自分の非は認めたようだな？」

「はい」

「それならいい。しかし覚えておくんだ。君がしてしまったことは信頼を失うことにつながるということをやな」

「……わかりました」

「なら、この話は終わりだ。仕事のほうはこっちで片付けておいたから戻ってかまわない」

「……ありがとうございます。クロノさん」

素直に私はクロノという青年に礼を言った。

そして部屋に入ろうとした、その時だった。

「……いや、すまない。少し待ってくれ」

私は呼びとめられた。

「はい、何ですか？」

「考えてみれば君がこういうし失敗をするなんて妙だと思ってな。朝から色々あったと言っていたが、それが関係しているのか？」

「聞いてくれていたんですね」

「まあな。気がたっていたのは事実だが、だからといって相手の言ったことを聞き洩らすようなことはしないさ」

……「こうやってさりげなく相手のことも心配してあげられるのは」
の人、クロノ・ハラオウン執務官の長所なのだろう。

「……話を聞いてもらってもいいですか？」

「ああ、構わない」

許可をもらったの私は、目の前にいる優しい青年にゆっくりと話し始めた

「……なるほど、そんなことがあったのか」

自分が悩んでいたことや、その解決策が見つかったことなど、とりあえず今日あったことを私は全部話した。

それを聞き終わるとクロノさんは何故か何かを考えるようなしぐさをとっていた。

「どうかしましたか？」

「……一つだけ疑問がある」

「疑問、ですか？」

「あの三人に自分がないと思っている才能を期待をされてしまったから君は悩んでいると言ったな？」

「はい」

「そして君は本当にそんな才能があるのか、自分は期待に応えるこ

とができるのか知るために訓練で答えを出そうとした」

「そうです」

「ここで疑問だ。君は何故わざわざ訓練で答えを出そうとするんだ？」

「……どういことですか？」

「彼女たちが新人たちによる新部隊を作ろうとしているのだとしたら、そこで答えを見つければいいんじゃないのか？」

「それは……」

「そうすれば自分には才能があるのかどうかという答えは出ると思うが」

「……それだと、もう一つのほうは答えは出ません」

クロノさんの言うことはわかる。

確かに一つの答えは出るだろう。

しかしもう一つの、期待に応えられるかどうかという答えは出ない。それでは意味がない。怖いのは変わらない。

何を言ってもこの二つの答えが出ないならば、私はなのはたちの話を受けることは出来ない。

……そう思っていた。この言葉を聞くまでは……

「君は期待とは必ず応えないといけないものだと思っているのか？」

当然です、と言うことは出来なかった。

何故なら、そんなはずないからだ。

「黙っていてはわからない。君は期待とは僕が言ったようなものだと思っているのか？」

「……そんなはず、ないです」

「その通りだ。期待とは必ず応えなくてはいけないものなんかじゃない。大事なのは」

「少しでも応えられるようにする、そんな心構えをもつこと……」

クロノさんの言葉を遮るように、私は自分の考えを述べた。

「わかっているじゃないか。それでいいんだ」

クロノさんはその答えに満足しているようだった。

しかし私はまだ迷っていた。

期待されるということの考え方が間違っていたことは理解した。

しかし怖いと思う原因が解決がされたわけじゃない。

私は、なのはたちに見放される、ことが怖いのだ。

結局のところクロノさんが言ったことは私が求めている答えとは違うのだと思う。

「まだ迷いがあるみたいだな？」

表情に出てしまったのか、私が迷いをまだ抱いていることは筒抜けだったようだ。

ならば隠し通すことは無理だろう。正直に話すのが一番だ。

「なのはたちに見放されたらと思うと怖いんです。だから答えが欲しかった。自信を持ってない私が少しでも自身を持てるように……」

顔を伏せながら私は話していた。だからクロノさんの表情は見えていない。

だがこのままでいるわけにもいかない。

ゆっくりと顔を上げるとそこには、少し呆れているようなクロノさんがいた。

「はあ。君は頭はいいのに、意外なところでにぶいんだな」

同じようなことをヴィータにも言われた気がする。

「君は自分が考えていることが、彼女たちも考えているとは思わな

いのか？ 君にとって彼女たちはそんなに冷酷な人間か？」

「……そんなことないです」

「なら信じればいい。例え期待に込められずとも、彼女たちはそんなことで見放すようなことは絶対にしないとな」

「……そう、ですね」

どうして私はこんなにも悩んでいたのだろうか？

彼女たちは優しい。

どんなことがあると誰かを見放すような真似はしない。

そんなの当たり前のようにわかっていたはずなのに。

「……こんな簡単な答えを、どうしてもすぐ出せなかったのだろうか？」

「僕にはわからない。僕があとと言えることはただ一言、もう迷う必要なんかないんじゃないか？」

「……クロノさん。話を聞いていただき、ありがとうございます」

「気にしないでいい」

「……わかりました。それでは失礼します」

クロノさんの返事も聞かずに私は背を向け部屋の前を通り過ぎて行った。

少し失礼だったかもしれないが何か言われたら後で謝ろう。

とりあえず今は彼女たちを探さないと……

そうして意気込んだ私が一人を見つけたのはほどなくしてのことだった。

「なのは、待って！」

焦ったためか少し大声になってしまった。

それに対し私の大声をあまり聞かないのはは少し驚きながら振り向いた。

「どうしたの、リリースちゃん？」

「話がある」

「大事なお話、みたいだね」

「用件だけ言う。朝のあの話、受けさせて」

「……念のため聞くよ。真剣に考えた？」

「考えた。考え過ぎなんじゃないかってぐらい」

私はなのはをまっすぐ見詰めていた。なのはも同じようにしていた。

そして

「……よろしくね、リリスちゃん」

なのはは手を差し出してきた。

「よろしく、なのは」

私はそれを握り返した。

「リリスちゃん。副隊長なんて立場は大変かもしれないけど頑張っ
てね」

「……そのことで、先に言っておきたいことがある？」

「なに？」

「なのはたちの期待に応えることは出来ないかもしれない。けれど
私、頑張るから」

「心配しなくても大丈夫だよ。リリスちゃんが出る範囲でいいん
だから」

なのはは微笑みながら、励ましてくれた。

（あんなに悩む必要なんてなかった……）

改めて私はこう思った。

「それじゃ、リリスちゃん。フェイトちゃんたちに教えに行こう」

「うん、そうだね」

これから大変なんだろうな、なんて呑気に考えながら私はなのとは一緒に歩き出した。その時

『マスター。ようやく答えを見つけましたね』

今まで黙っていた愛機デバイスが思念通話をしてきた。

(本当にやっと見つけられた)

『お疲れ様です』

(まだ早い。本当に疲れるのはこれからなんだから)

『そうでした。まだこのお言葉は早かったようですね』

(これから忙しくなるけど、一緒に頑張ろう)

『はい。マイマスター』

こんなやりとりをしながら、私は思ったことがある。

この子は私が望んでいた答えを知っていたのではないかということだ。

聞いても多分、答えてはくれないだろう。

でも何故か、私はこれが間違っではない気がした。

そんなことを考えたあと、私はなのとは一緒に新部隊の話を受けることをフェイト達に話した。

二人は予想していた通り、歓迎してくれた。

まあ、私は誘われた側だから、歓迎されなかったらおかしいのだが

……

とりあえずその後は色々な話を氣いたり、とにかく忙しく気づけば夜くになっていた。

部屋に戻って来た頃はもうすでに、夜遅くになっていた。

疲れ切っていた私はすぐさま寢床に入り寝ることにした。

こうして私の色々なことがあった一日は終わりを迎えた。

だが、私はまだ知らなかった。

この日の私がした選択が、大きく自分に関わるものであってしまったということ……

第五話（後書き）

唐突なんです、書いてて気づいたことをこの場で言わせていただきます。

クロノの台詞が思っていたより難しい！！

あまりクロノの台詞を聞いたことないので予想以上に苦勞してしまいました。

とりあえず、もしおかしいなと思ったらどのようなふうにおかしいか指摘してくれると助かります。

それでは今回はここまで入んで。

第六話をお楽しみに！

第六話（前書き）

今回は今まで以上に長く書いています。

第六話

周りには何も無い。

ただ白い世界が広がっている。

私が今いるのはそんな場所だ。

そして私は気づいている。

これは夢なんだと……

お前は愚かな選択をした。

何の前触れもなく頭に不快な声が響いた。

この声は聞き覚えがある。

全く感情がこもっていないこの声は昨日の夢でのものと同じだ。

お前は自分の罪を認めることとなる道を選択した。

「何を言っているの……？」

いつまで気づかぬふりをするつもりだ？

私の問いに応えることはなく、声は反対に問い返してきた。

「気づかないふり？」

どれだけの時間を過ごそうがお前が罪を犯したことは変わらな
い。

「私は、罪なんか！」

ならば何故、お前は震えている？

「なんの、こと？」

お前自身のことだ。気づかないはずがない。お前の心は恐怖に
震えている。

「そんなこと、ない……」

いくら強く振る舞おうとしても無駄だ。

何故なのだろう？

この声を聞いていると酷く恐怖を感じる。

これ以上は聞きたくない。

お前は弱い。この程度で心が壊れそうになるくらい。

「やめて……」

聞けば聞くほど怖くなる。

この声はそれをわかってて言っているみたいで、やめる様子はない。

もう、やめてほしいのに……

まだ抗うか？ 認めれば楽になるといつのに……

「もう、やめて。誰か、助けて！」

私は叫んだ。

誰もいない夢の中で、誰にも届くはずのない悲痛の叫びを……

だけど……

「リ……ちゃん」

私には聞こえた。

かすかに‘あの子’の声が……

「リリスちゃん！ リリスちゃん！！」

私は私を呼ぶ声に引っ張られるように目を覚ました。

目の前には必死に呼びかけてくれたのはが心配そうな表情をして立っていた。

「よかった。目が覚めたんだね。すごく苦しそうにうなされていたから心配したんだよ」

ただ目を覚ましただけなのに、なのははかなり安心した様子だ。

つまり私はそれほど酷くうなされていたのだろう。

「ごめん……」

「ほえ？ どうして謝るの？」

「心配、かけたみたいだから……」

「私のことは気にしなくていいよ」

「……ありがとう」

「どづいたしまして」

私は夢を見ていた先程までとは違って不思議と心は落ち着いていた。

むしろあの夢の中の私は何故あんなにも心が震えていたのかわからなかった。

そんな考え込んでいる私の隣でなのはは何故か気まずそうにしていた。

「なのは。どうかした？」

「えーと、リリスちゃん。聞きづらんだけど、今って何時か知っ

てる？」

「時間？」

私は携帯電話の時間を見た。

十時ちょうど。

今日はなのは達に九時に訓練場に集合するよう言われていた。

つまり……

「ね、寝坊!!??」

私はベッドから飛び起きて急いで身支度を始めた。

いつもの私からは想像できないくらい今の私は慌てていた。

しかしそれも仕方のないことだ。

十分、二十分程度の遅刻や寝坊ならまだともかく、一時間なんて洒落にならない。

なのはがここにいる理由だって約束の時間をとっくに過ぎているのにもかかわらず、私が出来ないから様子を見に来たのだろう。

「急いで用意するから、先に言っておいて！」

「うん、わかったよ……」

少し困ったような返事をしてなのはは部屋から出て行った。

「急がないと……」

『さすがに彼女たちでもこれ以上はよろしくないですね』

少し他人事のような声が聞こえた

「……………一つ聞いていい？」

私は動きを止めてその声に向かって話しかけた。

急いでいたはずなのだが、これを聞かないと気が済まなかった。

『何でしょう？』

「どうして起こしてくれなかったの？」

『私生活ではあまり私に頼らないようにする、とマスターがおっしゃたからです』

「……………あまり頼らないというのは、絶対に頼らないって意味じゃない？」

『その通りですが今回の場合は私が関与するほどのことではないと判断しました』

「……………」

確かに寝坊したことは私の責任。

この程度でデバイスに頼るのは間違っているというのわかる。

なのにどうしてこうも納得いかない気がするのだろうか？

「マスター。これ以上私との雑談で時間を潰すのはどうかと思います」

「……うん、わかってる」

このもやもやとした気分はとりあえず無視するようによろしく。

今は急いで準備して急いで行く。

それだけを考えよう。

……じゃないと自分が悪いのだが、誰かにおもいきり八つ当たりしてしまいそうだから。

私が集合場所にたどり着いたのはなのはが部屋を出てからそれから十分ほどだった。

誰かしらは不機嫌になっているかもしれないと思ったのだがそんなことはなかった。

むしろそこにいた人たちは何故か私をみた途端おかしな態度になっていた。

ヴィータもそこにいたのだが、そのヴィータでさえでさえ、

「す、少し遅えけど……なんか、あ、あったのか？」

驚くぐらいたどたどしい口調だった。

とりあえず素直に寝坊というのもまずいかと思ひ少しごまかすように言うことにした。

「何でもない。遅くなったのは謝るから、気にしないで……」

悪いことをしたという気持ちと、あとうまく表しづらい気持ちがあつて声が暗くなつてしまった。

「そ、そうか」

だがヴィータ本人はあまり気にしていなさそうだったので、私も気にしないことにした。

「そ、それじゃリリース。これ以上他のみんなを待たせるのは悪いから始めてもいい？」

みんなという言葉に反応して周りを見てみると確かに思ったより人がいた。

なのは、フェイト、はやての三人がいるのは予想通りだった。

ただシグナムさん、ヴィータ、ザフィーラさん、それにシャルルさんやクロノさんまでいた。

シャルルさんもシグナムさんたちと同じはやての守護騎士の一人だ。

はやての騎士は全部で四人。

つまりここに騎士全員が集まっていることになる。

さらに執務官という立場の人間もここにいます。

正直ここまでの人が一斉に集まるとは意外だった。

そこまで考えてふと思ったことがある。

今フェイトは始めてもいいかと聞いた。

ここで何かが始まるなんて聞いてない。

「始まるって何が？」

「えっ？ 昨日はやてから聞いてない？」

「あっ！ そうやった。昨日は集まるようにしか伝えておらんかった」

「……はやて。僕はこういうことはしっかりと伝えるべきだと思うのだが？」

「ごめんな、リリスちゃん。それでないきなりやけど、今からリリスちゃんにもらうことはなのはちゃんとの模擬戦や」

「模擬戦……？ 昨日言ってた？」

「そうや。あと昨日は正確な動きができるか知りたいとか言うたけど、難しいことは考えんでいいで。全力でなのはちゃんとやってみてや」

昨日の話は新部隊のこと以外はあまり覚えてはいないけど、なのはと模擬戦をしてほしいとは確かに言っていた気がする。

「はやてちゃん。さすがに昨日伝えていなかったのに今日いきなりなんて無理がないかな？」

「うーん、それもそうやな」

「……私は構わない」

迷っていた二人は驚いた表情をしていた。

「急いでやる必要はないんだよ？」

「なのは、大丈夫。いつかやるなら今やったって同じ」

「そうかもしれないけど……」

「はやても心配いらぬ。心構えとかならできて。それに私もなのはとどこまでやれるのか知りたいから。だから……」

なのはも全力でやってほしい。

そう続くはずだった言葉を飲み込んだ。

「……やっぱりなんでもない」

「そう?」

「何か言いたいことがあるんら言っつていいんやで?」

「なんでもないから。気にしないで」

なのはとはやては不思議そうにはしていたがそれ以上は何も言っつてはこなかった。

だが、私は知っていた。

何か言いかけたとしても二人は深く問い詰めるようなことはしない
と。

だからつい口を滑らせてしまった時も私は焦ったりはしなかった。

そもそも私が思いを口にださなつたのは理由がある。

もしなのは本人に向かつて思いを言えばなのはは全力で私と戦っつて
くれるだろう。

なのははそういう性格だし、私にとってそれは望むこと。

だけどそれとは別な思いも私の中にはあつた。

全力で戦えば今の私では完璧に負けてしまつたろう。

私はそれが嫌だつた。

負けてしまうのは当然、魔法に対する知識も経験もなにもかも相手のほうが上なのだから。

それでも嫌だった。

理由は簡単、悔しいからだ。

自分より圧倒的な存在感を持っているような人に負けるならまだ納得できる。

けれど自分と年も変わらなければ、見た目だって普通の少女と変わらない。

言っでは悪いけど威厳なんてものを感じるわけでもない。

どこにでも当たり前のようにいそうな、なのはという少女に完璧に負けるのは悔しい。

子供みたいな理由かもしれないが、こんな思いが存在するのだから仕方がない。

私はなのはに負けたくない。いや、勝ちたい。

なら勝つにはどうすればいいのか？

全力で向かってこられたら勝てる可能性など皆無だろう。

しかし力量を図るために向かってくるというなら話は別だ。

なのはにしてみれば相手の力量を図りたいのだから全力で潰しに行

つては意味がない。

もし全力でいって私が何もできずに終わってしまえば、私の實力はどの程度かわかるだけだ。

私が副隊長としての力があるかどうかはわからず終わる。

それでは意味がないはずだ。

これらの理由からなのはは全力ではこない。

全力でこないなら隙が生まれる可能性は高くなる。

もしくは不意打ちなんてものも効果をなすかもしれない。

つまりなのはに勝てるかもしれないのだ。

勝てるかもしれないから、なのはに思いを言わなかった。

なのはに全力で戦ってほしい、けれど負けたくないから全力で戦ってほしくない。

これら二つは相反する思い。どちらかを選ばざる得ない。

そして私が選んだのは後者だった。

そして選んだのなら迷いを抱いたりするわけにはいかない。

なのはが全力ではこないという確信があるのだから、それを精一杯に利用するだけだ。

「ほんならお二人さん。私らが指定する場所にそれぞれ待機してもらえるか？ あと始まりの合図は魔力弾を打ち上げるわ」

今回の模擬戦は広い訓練場が使用されるうえに疑似的に作る廃墟のようなフィールドになるため別々の場所で待機して始めることになる。

このような場所だと障害物が邪魔で互いの魔力による攻撃が通りづらいなどのデメリットはあるが、隠れやすいといったメリットもある。

これらをつまく利用しながら戦うことが今回のポイントになるだろう。

なのはが先に待機場所に言ったので私も行くこうとすると……

「リリース、頑張つてね。応援してるよ」

「うちも応戦するで。頑張りや〜」

「まあ、簡単におとされねえよう、必死にやれよ」

「今のお前に出来ることを私たちにを見せてみる」

「期待している」

「怪我とかしたら治してあげるけど、あまり無理はしちゃダメよ」

「君の力、見せてもらおうよ」

フェイト、はやて、ヴィータ、シグナムさん、ザフィーラさん、シヤマルさん、クロノさん、以上の人たちが励ましの言葉を贈ってくれた。

「頑張ります」

一言だけ自分に言い聞かすように返事をする。待機場所に向かった。ほどなくしてその場所にはついたが時間はまだありそうだった。

（ねえ、エターナルパルス？」

『何でしょうか？』

（ここまで言われて無様に負けるわけにはいかないよね？）

『当然ですよ、マスター』

話はそこで終わりだった。

自分の愛機デバイスの言葉が言い終わると同時に、魔力弾が打ち上がった。

「エターナルパルス。セット、アップ」

『了解。マイマスター』

私たちの声を合図に私たちは戦闘スタイルになった。

私は即座に行動した。

この模擬戦に勝つためにはいくつかの問題を解決していかなければならない。

その一つ目が相手の居場所を掴むことだ。

そこで私が選択した行動は、誰が見ても多分驚くものだろう。

なにせいきなり空を飛んで空から地上を探し始めたからだ。

なのはのように射撃魔法などが優秀な魔道士にとって今の私は遠くから攻撃できる言的になっていいるだろう。

『マスター！ 魔力弾、数は十。きます』

案の定なのはは仕掛けてきた。

そして見逃しはしなかった。

なのはが攻撃してきたその地点を。

「ソウルシューター！ シュート！」

私は自分の射撃魔法で向かってきた魔力弾を相殺させ、すぐさま地上に向かって降下した。

（まず第一の問題はクリアかな？）

『そうですね。ですが苦しいのはここからですよ』

(そうだった。油断は禁物か)

第一の問題は何とかわざと空に上がり、攻撃を受けるといった行動によってクリアできた。

なのはの位置はわかった。

当然なのははすぐさま移動するだろう。

後は私が今までのなのはの模擬戦での動きを頭で思い出しながら、次に何処に移動するかを予想して不意をついて攻撃をすればいい。

次のなのはの行動は、一度だけ距離をとるだろう。

相手があんな行動をすれば様子を見るため距離をとるのが普通だからだ。

それに対して私がすることといえば、単純なことにただ突っ込むというものだった。

今回の模擬戦はいくら私が妙な行動をとろうが、そのたびに相手に時間を与えてはなんの意味にもならない。

だからこそ私は迅速に動くことが必要になるのだ。

(多分、ここらへん)

私が予想地点にたどり着くとなのはの姿は確認できなかったが、予想通り複数の魔力弾が高速で飛んできた。

私はそれらを今度はシールドで防ぎきった。

先程より弾速が早かったため、射撃魔法が間に合わなかったのだ。

私とその魔力弾を相手し終わったころには、もうすでになのはの気配はなかった。

(くっ、逃げられた)

心の中で呟くと、私はすぐさまなのはを追跡した。

だが結果だけを言うと、次の場所でもなのはにはまかれてしまった。

実際のところ私がなのはの居場所を予測するというこの行動は、一見私が有利に思えるかもしれないがそういうわけでもない。

どうしてこちらの動きが予想されるのだろうと思うだけならまだいいが、それを利用しようと考えられたらかなりまずい。

何故ならば私の攻撃手段はほとんどが相手の姿が見えないと使えないものばかりだから、必然的に相手がいる場所には行かなくてはならない。

もしそれに気付かれればそこに罠でもはられるかもしれないからだ。

相手がなのはならばあまり回数を重ねるわけにはいかない。

(次あたりで絶対に見つけないと)

心の中で少し気合を入れると、次の予想地点へ急いだ。

そしてこれも四度目になるが、どこからともなく魔力弾は飛んできた。

けれどやっぱり姿は見えない。

いくら「魔力弾が飛んできたほう」に目を凝らしても、なのはの姿は見当たらない。

そこで私はふと閃いた。

（魔力弾が飛んできたほうにいないということは……）」

私は後ろを振り向いた。

そこにいた。

なのははそこにいた。

よく見ないとわからないけど、ほぼ崩れている建物の中に確かにいた。

（見つけた！）

私はすぐさま自分の杖を向ける。

「ソウルシューター・フルパワー！」

その声と同時に高速の魔力弾が一斉になのはへと向かう。

なのはからも同じように高速の魔力弾が飛んでくる。

そして互いにぶつかり合い相殺する。

あたりには多少の砂煙が舞う。

だがこの時こそ、最大の狙い目だった。

私はその砂煙にまぎれてなのはの後方へと移動した。

当然この程度で不意を突こうとしてもなのはでは引っかかりはしないだろう。

実際になのはのいる場所からでは私が移動したのは見えないうえ、砂煙がはれる前に後方へと移動したのになのははこっちを向いていた。

再び同じように続く射撃戦。

ただの射撃戦なら、私は勝てない。

徐々に押されて来ているのがその証拠だ。

「リリースちゃん。このままじゃ勝てないよ」

「確かにそう。このままじゃ勝てない。けれど！」

私が叫ぶと同時になのはが立っていた場所の真下から突如、四発の魔力弾が飛んできた。

それはなのはの両手両足に一発ずつ当たり、当たった場所を拘束した。

「こ、これは!?!」

「グライアルバインド。見た目はただの魔力弾だけど、当たった場所を拘束する。私が使うバインドの一つ」

さすがなのはもこの状況には驚いているようだ。

にもかかわらずすぐさまバインドから抜けるのはやっぱりすごいと素直に思う。

そもそもこのバインドはそんなに拘束力が強くはないのだが、それでも普通なら焦ったりして時間をかけるはずなのだ。

ここらへんの違いはやっぱり経験の差かと思う。

けれど私の狙いはうまくいった。

なのはは空へとあがった。

地上は突然バインドで拘束されるかもしれないのだから、この選択は当然だろう。

(第二の問題、クリア)

なのはを空に上げるといふ問題をクリアした私は心の中で呟き、なのはと一定距離を保ったまま空へと上がった。

この行動も相手にとっては意外なものかもしれない。

相手は下に降りることが出来ないのに対し、私は下で戦うことが出来る。

なのに私は空でなのはと直接対決する選択を選んだ。

理由はいくつもある。

「どうしてリリスちゃんもそらに上がるの？」

「まともな攻撃なんてあてられないから」

「一つ目はこれだ。」

下からいくら攻撃をしようが、決定的な一撃を入れるのは難しい。

射撃魔法も砲撃魔法もバインドも、下から使い続けてもなのはにまともにあてられるとは思わない。

「けれどさっきみたいに私が混乱すれば話は別だよ？」

「それも無理。あれ以上の策なんて考えていないから」

理由の二つ目がこれだ。

さっきの不意をついてのバインド以外の策で、あれ以上になのはを混乱させれるものは下にいるとなにもないのだ。

「それになのはの戦闘経験から考えて、もっとずばぬけたものでも

ないとよまれるから」

そう、三つ目にして最大の理由がこれだ。

これなら絶対いけると思えるような策でもないと、戦闘経験の無い私が考えたものなどすぐよまれてしまう。

これら三つの理由から私だけ下で戦っても勝てる可能性を見つけれなかった。だから空に上がったのだ。

「うん。リリースちゃんの言いたいことはわかったよ」

「それなら良かった」

「じゃあ、改めていくよ。リリースちゃん」

なのはとの空での闘いが始まった。

ここからが最後にして最大の問題だった。

最後の問題は、空中戦でなのはに勝つというもの。

まさに最難関と言えるだろう。

「デイバイシューター・フルパワー！」

「ソウルシューター・フルパワー！」

「シュート……」

お互いに自分の魔法を相手にぶつけている。

実力は拮抗しているように見える。

しかしこんな射撃魔法をぶつけあうという行為を何度繰り返したとだろう。

「くっ！ おさ、れてる？」

私となのはでは魔力量が違う。

私のほうが劣っているのだから、同じペースで使い続けていれば私のほうが早めに疲れは出る。

『マスター！ 上です！』

言葉の通り上を見ると数発の魔力弾が向かってきていた。

私はそれをよけきれず、まもとに受けてしまった。

「っ!?!?」

急いで態勢をもちなおそうとしたその時、突然手足が拘束された。

「設置型のバインド？」

今なのははバインドの魔法を使っている感じでない。

隙をみて少し前に設置していたのだろう。

「いくよ。これが私の全力全開！」

なのはあのモーションはまず間違いなく、ディバインバスター。
ならば……

(今ここでしかける！)

私は魔力をためた。

この状況は私にとって不利ではない。

むしろこの瞬間を望んでいた。

射撃魔法が一切こない、このわずかな時間を。

「なのは、甘いよ！ エターナルパルス！！！」

「了解。マイマスター！」

なのはは発射シークエンスにもう入ってる。

けれどぎりぎり間に合う。

「ディレクトソウルバインド！」

その声を発すると同時になのは手足は再び先程のように拘束された。

「えっ！」

ディレクトソウルバインドはただのバインドではない。

相当の拘束力を持つだけでなく、バインドをほどくという作業を4回も繰替えさなければならぬ特殊なものだ。

それゆえに消費する魔力量は多いという欠点もあるがこれぐらいは仕方ないだろう。

なのは今回は焦っていた。

今のなのは隙だらけだからだ。

私はすぐさま自分の拘束を外した。

「これで決める、なのは。エターナルパルス！」

『カウントスタート。10、9、8、7、6』

なのはにとって無情なカウントが始まる。

今から打つのは私の残存魔力で打てる一番の砲撃魔法だ。

これで私は勝つ。

『5、4、3、2、1、0』

「ソウルフォースバスター！！！」

私の打った砲撃は真っ直ぐなのはへと向かっていき直撃した。

周りに轟音が響き、当たりに砂煙が舞う。

「はあ、はあ、やった？」

徐々に砂煙がはれていった。

そこで私はある光景に驚愕した。

「そ、んな……」

無傷というわけではなさそうだが、砂煙がはれた先にいた少女は目立ったダメージはなさそうだった。

「今度はこっちの、番だよ！」

なのは再びディバインバスターの発射シークエンスに入っていた。

気づけば再び私はバインドで拘束されていた。

（もう、無理だよ）

私は諦めの声を心で呟いた。

その時だった。

もう、諦めるのかしら？

何処からともなく声が聞こえた。

まだ戦う術が残っているにも関わらず、諦めるのかしらと聞いているのよ？

（戦う術なんて、もう……）

私はそこで思いました。

（いや、まだあった。戦う術が……）

けれどこれで戦うとしてもチャンスは一回。

今の体力と魔力量では二回目はない。

思いましたよね。ならこれは私からの手助けよ。

それを最後に声は聞こえなくなってしまった。

（手助けって何を？）

『マスター、前を！』

よそ見をしていた私が前をむくと、そこにはちょうど砲撃魔法を発射するとこのなのがいた。

（急いでスタイルチェンジして！）

『マスター。何をするつもりですか？』

（お願い、早く）

『……了解!』

エターナルパルスがもう一つの形態、剣（なぐり）になると、

「デイベインバスター!」

なのはが砲撃を打つのはほぼ同時だった。

ここで気づいたのだが、バインドが何故か外れていた。

ならこの砲撃はぎりぎりかわせるはず。

そう思い私は精一杯横によけたのだが、その行動をした自分自身が驚愕した。

(なに、この速さ!?)

今までの私はこんなにも高速の移動が出来たことなんてない。

それなのに今の私は自分でも信じられないくらい的高速移動を可能としていた。

(詮索はあとにしよう。今は……)

目の前の相手に勝つためにこの砲撃を目くらましとして、後方に移動しなければ。

私なのはの後方につくのと、なのはの砲撃がやんだのはほぼ同時だった。

打ち終わってすぐだからかなのははこちらに気づくのにわずかに遅れた。

私はその隙を見逃さず高速の一撃を振るった。

デバイスで防ごうとしているが、今の私の剣撃はその程度ではとめられないという確信があった。

今度こそ決まったと思った。

なのに……

ガキインン！！

響いたのは金属音。

私の剣がデバイスに振れた直後、シールドが複数同時に出現しデバイスをごとなのはへ攻撃するまでにはいかなかった。

「二人とも、そこまでだ！」

ちょうどその時、クロノさんからの念話によるやめの声がかかった。

「終わった？」

「うん、そうみたいだね。リスちゃん、お疲れ様」

「ありがとう」

私たちが他の人たちのもとにたどりつくと私はすぐに座り込んでしまった。

「ずいぶんと疲れてるみたいね。このあとすぐ休むといいわ」

「シヤマルさん。私この後は仕事が……」

「ダメ！ こんなに疲れてるんだからしつかりと休まないと」

確かに疲れてはいる。

けれど今日は休日なんてわけじゃないのだから、この後は普通に仕事はある。

疲れているからって仕事をさぼるわけにはいかない。

「シヤマルさん。でも……」

「いや、君はこの後休んでもらって構わない。もちろんなのはもだ」

「いいんですか？」

「クロノ君、私もいいの？」

「ああ。失礼だが今回の模擬戦、こんなにも接戦になるなんて思っ
ていなかった」

「……接戦になったのは、なのはが私に力を合わせてくれたからで
す」

そうであれば今回のようにはならなかっただろう。

でも何故か他の人たちは不思議そうに見ていた。

「ええと、リリース。今回のこの模擬戦でなのは手加減してるように見えたの？」

「そう、だけど」

「リリースちゃん、なのはちゃんは手を抜いたりしてへんよ」

「えっ？ 何を言ってるの、はやて？」

なのはが手加減していなかったなんてあるはずがない。

「おいおい、はやてが言ってる事は本当だぞ」

「ヴィータまで何を？」

「主の言うとおりだ。もし仮にお前相手に高町が手加減なんてすれば今回の勝負、お前の勝ちで終わっていた」

「ですがシグナムさん。最初は様子見のような感じでした」

「最初だけはな。お前たち二人が空での闘いになったころは手加減などしてはいなかった」

「ザフィーラさん……」

「私の目から見ても二人の実力は拮抗していると思うわ」

「シヤマルさん、本当ですか？」

「ええ、本当よ」

「……でも」

「君はいいかげん自分の力を知るべきだ」

「私の力？」

「今この場に集まっているメンバーをよく見てみるんだ。何も思わないか？」

「すごい人たちがそろっているといます」

「君がいうそのすごい人たちとやらが、今日はこれを見るためにここにいるんだ。これがどういう意味かわからないか？」

「……」

そんな言い方をされればいくら私でもわかる。

でも思ったことはなかった。

私がないのはたちと同等の強さを持っているなんて。

射撃魔法や砲撃魔法はなのはには勝てないし、接近戦ではシグナムさんたちに勝てない。

誰にも勝てない私がそんなに強いと思えなかったのだ。

「確かに君は射撃や砲撃といった遠距離からの攻撃だけではな
に勝つことは難しい。だがそれがなのはに勝てないという意味には
ならない」

「どういう、意味ですか？」

「例え遠距離からの攻撃で勝てないとしても、特殊なバインドや接
近戦。こういったものを使えば勝てるかもしれないということだ」

「……クロノさん、一つ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「私は今までずっと自分は弱いと思っていました。クロノさんから
見たらどうですか？」

「君は弱くなんかない。もっと自分に自信を持っていい」

「ありがとうございます」

私が例を言つと、ころ合いを見計らっていたようにはやてが話し始
めた。

「それじゃみんな、そろそろもどろか」

「うん。それじゃリリス、ゆっくり休んでね」

「リリスちゃん、ゆっくり休むんやで。それと、正直驚いたわ。いつのまにかこんなに強くなっていたんやね」

「今度あたしとも模擬戦しろよ。あと最後のあの動きは悪くねえからいつでもだせるようにしとけ」

「私が今度は相手する。あの動きがお前の本当の動きなのだとしたら興味はあるからな」

「今の二人は気にしなくていい。俺から後で自重するように言っとく」

「そうそう、あまり言うこと聞かなくてもいいからね。自分の体のことを大切にしていね」

「では僕も戻る。明日からはいつも通りで頼む」

七人はそれぞれの性格にあった言葉を贈りながら戻って行った。

今この場にいるのは私となのはだけだ。

「昨日も最後はこんな風に二人だったね」

「そつえば、そうだった」

「……ねえ、リリスちゃん。一つ聞いてもいいかな？」

「なに？」

「最後のあの接近戦で見たあの動きのことなんだけど」

「……あれは、偶然」

「偶然、出来るものなのかな？」

「出来たんだからしょうがない」

「……わかった。じゃあこれはお願いね。もうあんな動きはしないようにして」

「どうして？」

「自分でもわからないの。何故かリリスちゃんはもうやっちゃ駄目な気がして。ごめんね、いきなりこんなこと言って」

「気にしてない。それより疲れたから部屋に戻ろう、なのは」

「そうだね」

私たちは二人で戻って行った。

途中歩いている時、私は何故か疑問を感じた。

どうして妙な声が聞こえたことを話さなかったのだろうか？

考えてみたが答えはでなかった。

ならばこれ以上考える必要はないかと結論付け考えるのはやめた。

(……眠い)

とりあえず今はすぐに部屋に戻って寝たかった。

それはどうやらなのはも同じようだった。

私たちは自然と歩く速さを上げながらそれぞれ自分の部屋へと戻って行った……

第六話（後書き）

前書きにも書きましたが今回は何故かやたらと長いです。

ちよつどきりのいいところまで書くころと思つたらこんなにも書いちゃいました。

今までと違って長くなってしまったため、読みづらく感じたりすみません。

また投稿するのが遅れてすみませんでした。

期末テストがあつたもので……

それではこれ以上しゃべっておきたいこともないのでここらへんで。

第七話をお楽しみに！

第七話

なのはとの訓練を終えて部屋へ戻ってきた私がまず最初にした行動は、ベッドに倒れこむことだった。

「つかれた……」

『お疲れ様です。お休みになりますか？』

「うん。寝る」

相当疲れているのか、私はどうしようもないぐらい眠かった。

このまま寝たいぐらいだが汗をかいたし服も汚れている。

さすがにこのまま寝るわけにはいかない。

かといってシャワーを浴びる元気などないため、億劫だが私は立ち上がり軽くタオルで体をふき適当に見つけた服に着替えた。

そして私は再びベッドに倒れこんだ。

『それではマスター。ごゆっくりお休みください』

「うん。おやすみ……」

私はゆっくりと目を閉じた……

目の前に広がるは白い世界。

何も無い孤独を感じさせる世界。

私が今いる場所はそんな場所だった。

今日の朝もことよく似た場所に私はいた。

ただ朝とは一つだけ違うところがあった。

それは目の前に人のようなものがあるということだ。

何故か全てがぼやけて見えて顔も身体も何もかも詳しくはわからないが、確かに人の輪郭をしたものがいた。

「……………貴女は、誰？」

私は目の前の何かに声をかけた。

「……………」

しかし当然だったのかもしれないが返事などなかった。

そもそも私の夢に現れたこの得体のしれない何かに、回答を求めること自体が間違いなのかもしれない。

「……………ねえ。貴女は、誰なの？」

にも関わらず私はこの何かに問いかけることをやめない。

「……………」

返事はない。

それでも私は呼びかけるのをやめるわけにはいかない。

少しでも安心したいからだ。

私がかここ最近見る夢ではいつだって、頭のなかに嫌な声が響く。

耳を塞ごうが何をしようが声は無情に私のなかにただ響く。

そしてその声を聞いていると私はどうしようもなく恐怖を感じる。

何とか解決しようとしても、解決策なんてわからない。

けれど目の前にいるこの何かは、こんな苦しみから私を解放してくれる気がしたのだ。

そんな根拠なんてないが不思議と私の考えは間違っではないとい
う確信のようなものがあつた。

だから声をかけた。

会話の内容なんてどうでもいい。

ただこの何かと話すきっかけのようなものがほしいと思い、最初に頭に浮かんだのがたまたま何者かを聞いてみようというものだった

だけだ。

「ねえ。答えて。貴女は、誰なの？」

そして私は三度目の問いかけをした。

「……それを聞くことに何の意味があるのかしら？」

三度目にして初めて声を聞いた。

「貴女が私の正体を知ることに関わってもあるというの？」

「……ないなら最初から、こんなこと聞かない」

「あら？ だったらそれが何か教えてもらえると助かるわ」

「……私の夢に意志をもった私以外の誰かがいる。その正体を知ることに関わることができるとも思えない」

「なるほど。それが貴女の言う得ね」

「そう」

ここまで私の望み通り会話は出来てる。

順調なはずだ。

……なのにこの胸の奥で感じる妙な気持ちは何なのだろう？

この気持ちが影響しているのか、この人に頼ることも思えないと思

うことが間違いな気がしてきた。

油断は出来ない、そう思い続けていなければいけない気がしてきた。

(どづ、して？ やっぱり話しかけるべきではなかった……？)

心の中で後悔にちかい言葉を呟くが今更遅い。

私は話しかけてしまったし相手も反応した。

もういくら悔もつが遅い。

多分あの無反応だった二回こそが、選択肢を変える最後の機会だったのだ。

今となつてはこの選択が間違いだったとしても進むしかない。

いや、間違いではないと信じるかしかない。

「……いて……しら？」

「えっ？」

そこで私は気づいた。

何か話しかけられていたことに。

「貴女、ちゃんと聞いているのかしらと言ったのよ？」

「あっ……」

「そちらから話しかけてきておいて、上の空でいるのはどうかと思うわよ?」

確かにこの一度考え込むと周りのことに全く気を向けられなくなるのは、さすがに直すないとまずいかもじれない。

「まあ、いいわ。それで何処から聞いていないのかしら?」

「……何か話していたの?」

私の言葉に相手は呆れたような表情をしながらため息をついた。

私はそこでようやく気付いた、そして驚愕した。

どうして今になってなのかはわからない。

だが今まで靄がかかったようにはっきりと見えなかったのに、今は相手の表情が良く見えるのだ。

けれど私が一番に驚いたことはそこではない。

(私と、同じ顔……?)

よく顔が似ているというならまだいい。

けれど髪の色を除けば、まるで鏡を見ているかのように目の前の人とは私と全く同じ顔をしていた。

「どつこう、こと……?」

つい声に動揺の声を漏らしてしまうほど今の私は気が動転していた。そんな私の様子を見ていた相手もどうやら少し驚いているようだった。

何に対してかはわからない。

私の様子が相手が驚くぐらい異常だったのだろうか？

こんな見当違いなことを考えていたからだろう。

「まさか貴女、私の顔が見えているの？」

すぐに応えることができなかった。

時間にすれば十秒程だと思うが、それぐらいの時間をかけて私はようやく返事を言っかわりに頷いた。

それを見た私と同じ顔をしている女性は、考え込むような仕草で何かを呟いていた。

だが今はそんなことより先に確かめたいことがある。

それは相手の正体だ。

会話をするという口実のために先程は適当なことを言ったが今は違う。

はっきりと何者なのかを確かめないとこの気持ちが続くことはな

い。

「貴女は、本当に、誰なの？」

そうして私は四度目になる問いかけをした。

「……全てを教えてはあげられないわ。それでもいいというなら」

そこで相手の声は唐突に小さくなり始めた。

同時にある特有の感覚が襲ってきた。

(まさか？ 夢から覚めようとしているの？)

まさに最悪のタイミングだ。

何も相手のことがまだわかっていないのに、もう終わりが近づいているなんて。

けれどこのまま何も知らずに終わるなんて御免だ。

せめて一つでも知ってからでないと。

そう思っているのに、声を出したいのに、もう無理だった。

身体は徐々に消え始め、身体のごくも動かすことが出来なかった。

……夢から覚めることがここまで嫌だと思ったことなんて今までにない。

もどかしい気持ちでいっぱいだった。

その時だった。

「……………また、会えるはず……………」

ただ一言それだけが聞こえ、私の身体はこの白い世界から完全に消えた。

目を開けるとそこには見覚えのある天井が見えた。

当然だが周りを見渡してもあの人はいない。

『何かをお探しですか？』

「なんでもない。それより、どれぐらい寝てた？」

『三時間ほどです。ゆっくりお休みになれましたか？』

「うん。ゆっくり休めた」

『それは良かったです』

私は夢のことを今ここでこの子に話そうかと思ったがやっぱりやめた。

別に自分からわざわざ話す必要もないと思ったからだ。

ないだろうが夢を見たのかといったことを聞かれない限り自分から話すことはやめておこう。

「じゃあ今から仕事に戻らないと」

『マスター。今日は仕事をしなくていいと言われていたはずですが？』

「だけど他にやることがない。それに少しでもやっておいて損はない」

『早急に終わらせなければならぬものでもあるのですか？』

「それは、ないけど……」

『でしたら、なのはさんの部屋に行って頂けませんか？』

「なのはの部屋？ どうして？」

『マスターが目覚める少々前に、この部屋に一度彼女が訪れたのです。まだマスターは眠っていたので言伝を預かっています』

「言伝って？」

『はい。目を覚ましたら私の部屋に来て、とのことですよ。なので行かれてはどうですか？』

「……わかった。じゃあ行こう？」

『いえ、私は置いていってもらって結構です。どうやらマスター個人にお話があるようでしたから』

「ならいい機会だから、ついでにメンテナンスに出そうか？　これから忙しくなると思うから」

『では、お願いします。マスター』

私たちは部屋を出ると偶然そこでフェイトに出会った。

事情を説明するとフェイトもどうやら自分のデバイスをメンテナンスに出すようだったので一緒に持って行ってもらえた。

私はそのまま直接なのはの部屋に向かったのだが、なのはは部屋にいなかった。

なので私は今なのはを探すために歩き回っていた。

私はその途中あることを考えていた。

それはさっきの夢に関係することだ。

私が最初あの女性ひとと話した時、何故かそれはやってはいけないことだった気がした。

話してはいけないなかったのかもしれないなんて思った。

けれど顔が見えてからは違った。

動揺していたからあの時は気づかなかったけど、明らかに最初のときとは違う感じだった。

どっちかという話して良かったのではないかという思いがあった。

まるで真逆の思いを一人の人物に抱いた。

一体何故なのだろう？

「はあ……この頃こういいうのが多い気がする」

こういふのとはいくら考えても答えが出ないものことだ。

今回も自分のことなのに自分で答えが出せない。

……少し情けなく感じる。

「あつ、リリースちゃん！」

私が自分のことで落ち込んでいると後ろから大声が聞こえた。

振り向くとそこにいたのは私が探していた人だった。

「なのは。探してた」

「ごめんね。ちょっとはやてちゃんのところに行つて……」

「そうだったんだ。話があるって聞いたけど？」

「うん。そのことなんだけど私の部屋に来てもらってもいいかな？」

「……うん、いいよ」

「……リリスちゃん、何かあったの？」

「どうして？」

「少し暗い表情をしてたから」

「そんなことない。大丈夫だから」

「……何かあるなら遠慮なく言ってね」

「わかった」

自分では気付かなかったが、つい悩んでいたのが表情に出てしまったらしい。

なのはたちに心配をかけさせたりしないために次からは気をつけな
いと。

私はひっそりと心に誓った。

「それじゃ、行こう。リリスちゃん」

「うん。なのは」

そうして私たちはなのはの部屋へと改めて向かった。

他愛無い話をしながら……

第七話（後書き）

少し遅いかもしれませんがまず初めに、あけましておめでとござい
います。

年があけてから初めての投稿となります。

年末年始は忙しくて書いてる暇がなかったため投稿するのが少し遅
れました。

もう少しペースを上げたいのですが、予定も色々多くなってなかなか思
うようにいかなそうです（泣）

今回は前話に比べたら短いですが、普通はこれぐらいです。

前話は長すぎでした（汗）

これからもだいたいこれぐらいの長さで書いていく予定です

それでは話すこともなくなってきたのでそろそろ終わりにしようと思
います。

第八話をお楽しみに！

第八話

なのはの部屋についた私はすぐさま一緒にいたなのはに話を聞こうとした。

ここまで呼ばれるくらいだから大事な話なのかもしれない。

「それで、話って何？」

「……その前に約束してもらえる？」

「約束って？」

「……私が何を聞いても、怒らないで」

そう言ったなのはの表情は暗かった。

私は戸惑った。

予想が全く外れていたことに対する戸惑いもあるが、一番はやはりなのはの表情だった。

ほんの少し前までは、いつもと何も変わらないのはだった。

なのに今は違う。

どこか思いつめているような様子だった。

「……ダメ、かな。こんな約束するの」

すぐに私が応えなかったためか、なのはもう一度だけ私に聞いてきた。

……本当ならそれに答える前に、私が聞きたいことがあった。

どうしてそんな表情をするのか？

どうしてそんな約束をするのか？

主にこの二つだ。

どうしても気になるならこの二つをなのはに問いかければいいだけだ。しかし

「……約束する」

私はそんなことを聞くよりなのはに自分の答えを聞かせることにした。

私の疑問はすぐに解決しなくてもいい。

もしかしたらなのは話を聞けば分かるかもしれないと思ったからだ。

それになのはあんな表情を見て、“約束する”という以外の返事を言うことなんて私には出来なかった。

「ありがとう。リリスちゃん」

「うん。それで、話って?」

「……リリスちゃんはもう私のこと、恨んでない?」

「えっ?」

私がなのはのことを恨む?

そんなこと、あるはずがない。

なのはは私にとって大切な人だ。

なのに、どうして?

そんな聞き間違えたのではないかと一瞬だけ疑ってしまうぐらいなのはの言ったことは予想外すぎるものだった。

私が戸惑っているのがわかったのか、申し訳なさそうにしながらなのはは言葉を続けた。

「いきなりこんなこと聞いてごめんね。でも不安なんだ。私はリリスちゃんにまだ……」

「どうして、そんなふうに思っの?」

「夢を、見たの……」

そう小さく呟いたのはは今にも泣き出してしまうそうぐらい不安そうな表情をしていた。

「その夢の中だと、私はある場所に急いで向かっている。距離はあまりないから、時間も対してかからない。そのはず、なのに……」

「な、なのは？」

泣いていた。

なのはが泣いていた。

言葉に詰まったと同時になのはは泣いていた。

「何処まで、行ってもたどり着かない。急がないと、いけない、のに。早く、しないと、大切な友だちが、悲しむのに……」

それでもなのははやめない。

泣きながら、何度もつまりながら、夢の話をやめない。

「私が、行かないと、リリスちゃんが。リリスちゃんが」

「もういいよ」

「……まだ、終わって、ないよ」

「それでも、もういいよ……無理に話す必要は、ないから」

半ば強制的に私はなのはの話をやめさせた。

ここまでの話でなんとなくどんな夢だったのかわかる。

多分なのはが見た夢とは私との私の家族がある事故に巻き込まれた時の夢だ。

……なんて悲しい夢をみたのだろう。

真実よりもっとひどい。

そもそも事故に巻き込まれたあの時、なのははたまたま近くを飛んでいて私たちを見つけてくれたのだ。

飛び続けているのに目的地に辿りつかないなんて、そんな辛いことがあったわけではない。

それにこれは聞いていないから推測でしかないが、なのはの様子を見たところ最終的に私たちの家族は……………

「ごめんね。本当に、ごめんね……………」

なのはは私に謝り続けている。

なのははただ夢を見ただけにすぎない。

そんなに気にすることなんかじゃない、などと思う人もいるかもしれない。

けれど私は知っている。

夢を見ることで人の心は不安に押しつぶされそうになってしまうこともあるということ。

そして私は知っている。

こんな時は誰かがそばにいてくれるだけで助けになるということを。だから、私は

「リリースちゃん。本当に」

謝り続けているなのはを、優しく抱きしめた。

なのはは私を不思議そうに見上げた。

「リリース、ちゃん？」

私はなのはを安心させるように声をかけた。

「なのは。もう、泣かないで。私がなのはのことを恨むなんてことはないから」

「どうして？ 私は……助けてあげられなかったんだよ？」

「なのはのせいじゃない。あれは不幸な事故だった。なのはは一生懸命に助けようとしてくれた」

「それじゃ、意味ないよ……」

なのはは顔を伏せ、消え今にも消えてしまいそうな声で呟いた。

そして悲しい呟きはまだ続く。

「頑張つて、助けようとしたよ。でも、それだけじゃ、ダメ。助けることが出来なかったら、助けようとしたことなんて、意味ないよ……」

なのはの呟きはそこで終わった。

どれだけなのはが助けられなかったことを後悔をしているかは、呟きを聞いていた私にはよくわかる。

だけど

「それは、違う」

私はなのはの言葉を認めるわけにはいかない。

「助けることが出来なかったら、助けようとしたことなんて意味がない。なのは、それは違う」

「違う、ないよ」

「なら、なのは。一つだけ聞くけれど、目の前に絶対に助からないと一目でわかる人がいたら、助けようとしなない？」

「そ、そんなことしないよ！」

突然の酷い質問をなのはは、伏せていた顔を上げて私の顔をみながら必死に否定した。

「でも、なのは。やっぱりその人は死んでしまった。そんな事があつた時、助けようとしたことなんて意味がなかったって、本当にそ

「思うっ？」

「……そんなこと、思わないよ。そんな酷いこと」

「なのは。それでいいの」

最初に私は安心させるように呟いた。

「人は助けようとしなければ誰も助けられない。だから例えどんなことでも、助けようとしたことが意味がないなんて間違ってる」

二度目に私は諭すように呟いた。

「だから、もうさつきみたいなお話は言わないで」

最後に私は少し怒った口調で呟いた。

「リリース、ちゃん……」

まだなのはは何処か信じ切れていない表情をしていた。

でもこれ以上、私が言えることなんて一つしかない。

これが最後になることを信じて私は自分の思いをなのはに伝えた。

「なのはは私の家族を助けようとしてくれた。私にとってこんなに
も意味があることなんてない。だから恨んでもいない。安心して」

「……ありがとう。リリースちゃん」

「うん」

その会話を最後に私たちは特に話すこともなく、そのままだった。
そう、私になのはを抱きしめている格好だった。

(これってもしかして、私かなり恥ずかしいことしてる???)

一度でも意識してしまうともう駄目だった。

恥ずかしいって気持ちが止まらず、顔も熱くなってきた気がする。

唯一まだ助かっていることと言えば、なのはがちょうど私の顔を見ていないことだろう。

そう思った矢先のことだ。

「どうしたの？ リリスちゃん、顔が赤いよ？」

……どうしてなのは私の顔をみるのだろう。

まあ、嘘をついてもしょうがないので、素直に言うことにした。

「えっと、私になのはを抱きしめていると思っただら………」

「恥ずかしくなっちゃった？」

「……そう」

「にやはは。リリスちゃん、もっと顔が赤くなったよ」

笑いごとではない。

そもそも私は他人との触れ合いなんて、家族以外にはほとんどないのだ。

手を繋ぐことですらあまりない。

そんな私かなのはを抱きしめているなんて、恥ずかしすぎて気を失ってしまいそうになるくらいだ。

嫌なわけではない。

けれどこればかりは自分の性格だからどうしようもない。

(なののはが少しでも離れれば、少しは落ちつくかも?)

私はそう思い私の服を掴んでいるなののはの手を放そうとした。

しかしなののはは私が手を触れた瞬間、より一層服を強く掴んだ。

掴んだその手は微かだが、震えていた?

「なののは?」

「もう少しだけ……このままでいさせて」

よく耳を澄まさないと聞こえないくらい心細そうな声でなののはは頼んだ。

そんな声で頼まれたら、私は

「いいよ」

断れるはずがない。

不思議とこういう状況だと私は恥ずかしいなどと思わないらしい。

全くもって都合がよすぎることだ。

私たちは再び特に何もせず、そのままでした。

私たちはただ時間が過ぎるのを待った。

そしてどれほどの時間がたったかはわからない。

なのは自分から身を離れた。

「やっと、落ち着いたみたい」

「そう。よかった」

そこで私はたまたま時計を見ると、もう夕方ぐらいだった。

意外と時間がたっていたらしい。

この時間ならもうデバイスのメンテナンスも終わっているだろう。

「それじゃ、私は部屋に戻る」

「うん。わかった。お話に付き合ってもらってありがとね」

「なのは。礼を言っただけか」

「そうかも、しれないね。でもお礼を言うことは大切なことだもの。ちゃんと言わないと」

「……いつものなのはに、戻ったみたい」

私は微笑みながらなのはにこう話し

「……リリースちゃんのおかげだよ」

なのはは微笑みながら私にこう答えた。

「また、悩みがあったら言って」

「うん。そうするね」

その言葉を最後とし私はなのはの部屋を出た。

そのままデバイスを受け取りにメンテナンス室へと向かった。

その途中、私はある考え事をした。

それは夢のことだ。

私が夢というものに悩みを持っているこの時期に、なのはが嫌な夢を見たことが気になるのだ。

それになのが見た夢とは私の過去についても触れるもの。

ただの偶然の一言で済めばいいのだが……

(……深く考えないでおこう)

私は考えることをやめた。

今の私が出来ることなんてない。

あるとすれば偶然であることを信じるぐらいしかないのだ。

私は少しばかり歩みを速めメンテナンス室へと向かった。

しかしその瞬間にも嫌な予感が拭いされることはなかった……

第八話（後書き）

今回はなのはが泣くというやってみたかったシーンがありますが、正直甘く見てました。

表現方法が難しく、中途半端な感じになってしまいました。

……少し反省してます。

また、これは何回か言ってる気もしますが、変なところやおかしな表現などがありましたら、教えていただけると助かります。

それでは、ここで終わりにします。

次の話をお楽しみに！

第九話

『そんなことがあったのですね』

部屋に戻ってきた私はエターナルパルスになのはと何を話していたのかを教えていた。

最初は少し話すのを躊躇った。

なのはの様子が少しおかしいと感じ、心配していたことを聞かなければ話はしなかっただろう。

『彼女はもう大丈夫なのでしょう？』

一通り話し終えたが、まだこの子は心配なようだ。

「なのはが落ち着いたって言った以上、私たちはそれを信じるしかない……」

少し冷たい言い方もしれない。

けれどなのはは誰かに心配をかけたかすりすれば、自分を責めてしまうような性格をしている。

少しでもなのはのことを思うなら気づかうより信じてあげたほうがいい。

私はそう思っている。

『そうですね』

そのことをこの子もわかっているのか、それ以上気づかうようなことは何も言わなかった。

次にこの子が口に出したのはこの話をしたら多分聞かれると思ったものだったため、ある意味予想通りだった。

『マスター。先程の話の中で一つ気になることがあったのですが、お聞きしてもよろしいでしょうか？』

「……………事故のこと？」

『はい』

……………正直、話すだけなら別に構わない。

ただこの子がどうして知りたがるのかが気になる。

それを聞いてからでもいいだろう。

「どうして、知りたいの？」

『私は貴女のことを知りたい。ですから教えてください。これから永遠に守り続ける貴女のことを……………覚えていますか、この台詞？』

「それは……………」

忘れるはずがない。

私たちにとってこれ以上ないぐらいの大切な誓いの言葉だ。

忘れるほうがおかしい。

『どうして知りたいのか、という問いの答えにこの台詞はなっていないませんか？』

守ると決めた人のことを知りたいと思う。

確かになっている。

私を満足させるだけの答えになっている。

「……わかった、話してあげる」

『ありがとうございます』

これから話すのは決して楽しい話なんかじゃない。

お礼を言われたことに少し抵抗を感じた。

(そつえばはこの話を誰かにするの初めて)

今まではこのことを聞かれても誰にも話さなかった。

聞いてくる人なんてそんなにいたわけではないがやはり多少はいた。

それもまだ心配して何があったのか聞いてくれるならまだいい。

だが興味本位なんて冗談じゃない。

初めて聞かれた人がそんな理由で聞いてきたのだ。

それ以来誰にも話すことはなく、聞かれることも嫌だった。

けれどこの子だけは別。

嫌だ、なんて思わなかった。

この子になら話してもいい、そう思った。

そう思えるのはこの子が私のことをどこまでも信頼してくれるからだ。

それなのに私はこの子に何もしてあげられていない。

何か喜ぶことをしてあげたい。

そう思うが何をすればいいのかわからない。

こんな時、本当に薄情な自分が嫌になる。

(……弱気になってる場合じゃない。何かしてあげることはないの？)

そう思った矢先のことだ。

ある提案を思いついた。

早速、聞いてみることにする。

「エターナルパルス。ついでに私の過去の話、聞いてみない？」

『よろしい、のですか？』

その声が少し嬉しそうに聞こえたのは偶然じゃないと信じたい。

「うん。あまり楽しい話じゃない。だけど私は貴女に聞いてほしいから」

これは私なりのお礼でもある。

口にはつきりと出したことはないが、この子は私の過去がどういうものだったのか知りたがっているようだった。

それを私は今まで気づいていたにもかかわらず、他人に自分の過去を必要以上に知られたくないと思っていたため話したことはなかった。

例え人には話したくないことがあるとはいえ、この子との誓いを破っていたことには変わらず罪悪感も感じていた。

だから過去について話そうとしている今、一緒に話そうと思ったのだ。

例え話したところでこの子が喜んでくれるかどうかはわからない。

でも今の私が出るのは、前に私のことを知りたいと言ってくれたこの子の言葉を聞き入れてあげることぐらいなのだ。

信じて話すしかない。

『マスター。お願いします』

「うん」

私も話すついでに過去の記憶へと遡ることにしよう。

私の記憶の始まりは白い殺風景の薬品の香りが微かにする部屋から始まった。

その時まず最初に思ったことはどうして病院で寝ているのだろうかではなく、自分は誰なんだろうと思ったことだ。

この時まで自分が記憶喪失を体験することなんて予想もしていなかった。

ただ不思議なことに私はここが病院という建物であることは覚えていた。

一般的な知識も忘れたわけじゃない。

思い出せないのは自分のこと、そして自分が今まで関わってきた人だ。

家族の顔すらわからない。

そんな時だった。

部屋の扉が開き一人の女性が姿を見せた。

着ている服からすぐに看護婦であることはすぐにわかった。

その看護婦は私が目を覚ましていることを確認すると、まるで信じられないというような表情をした。

その時何か色々と言われたがあまり覚えていない。

唯一覚えているのは、私は一年間も昏睡状態だったということ。

目を覚ませたことは奇跡に近い、という二つだ。

その看護婦はそのあと急いで部屋を出て行った。

それからほどなくして違う人たちが姿を見せた。

一人は先程の看護婦。

二人目は少しやつれて貧弱そうに見える男性。

三人目は優しそうな印象を持てる女性。

四人目は私より少し年上な感じの女の子。

ここにいる人たちは一つだけ共通点があった。

それは皆して涙を流していることだった。

そこで私は気づいた。

看護婦を除くこの三人が私の家族なのだ。

きつと私が目覚めたことが嬉しいのだろう。

けれど私は嬉しいなどと思うことは出来なかった。

むしろ私は恐怖のあまり少し震えていた。

記憶がないことを伝えることが怖かった。

お父さん、お母さん、お姉ちゃん、記憶がない私とその言葉を口にするのが怖かった。

「リリース、よかった」

ここで男性はそう言って笑いかけてくれたが、恐怖が紛れたわけではなかった。

むしろ気が動転していたからなのか、あることを聞いてしまった。

「リリース？　それが、私の名前なの………？」

この時一瞬だけ見えた表情は一生忘れることはないだろう。

それほど悲しげに見えたのだ。

それから三人は必死に自分たちのことをそして私自身のことを聞い

てきた。

一度でも禁句とも言えることを聞いてしまった私は誤魔化すこともできずあるがまま答えた。

結果は全て、わからないの一言だった。

一通り全部聞き終わった後、待っていたものは静寂だった。

誰も、何も、言葉を発することが出来なかったのだ。

私はその時の現状があまりにも悲しかった。

そして嫌だった。

だからなのか私は殴られたっておかしくないようなことをこの時言っただ。

「私のことは、忘れてください」

当然他の人たちは驚愕したような表情だったが、構わず続きを口にした。

「記憶がない私は、皆さんのことを家族だって思えません。こんな酷い子なんて忘れたほうが」

この後の言葉は続けられなかった。

思いつきり頬を叩かれたのだ、そこにいた女の子に。

その時言われたことは今でも覚えてる。

確かこうだった。

「バカなこと言わないで！ リリスは家族なの。覚えていなくたって家族なの。家族のことを忘れることなんて出来るはずないでしょ！！」

泣きながら目の前の女の子は凄く怒っていた。

昔の私はそこで気付いた。

自分がどんなに酷いことを言ったのかを。

そして私は泣き出してしまった。

叩かれたのが痛かったからなどではなく、自分のことをこんなにも思ってくれる人がいるということに気付けた、それが嬉しかったからだ。

私が泣きやんだ頃、まるでタイミングをはかっていたかのように医者者が一人姿を見せた。

そこで話していたことは詳しくは覚えていないが、確かもう少しばかり入院してもらう必要があるというものだった気がする。

その後は私はずっと家族と話していた。

私は何が好きで何が嫌いなのか、そんな他愛無い話をずっと続けていた。

そして気付けばもう当たりは暗くなり始め、帰る時間になっていた。名残惜しいが仕方ないと諦め、私は家族を見守っていったのを覚えている。

「ちょっと、休憩していい？」

『はい。構いませんよ』

とりあえず私は目覚めたその日のことをある程度まとめながら話していた。

『記憶喪失、だったのですね』

「驚いた？」

『はい……』

声が少し暗く聞こえた気がする。

だから

「……気にしないで」

安心させてあげることにした。

「もう昔のことだから、今は気にしてない。それに私から話し始めたんだから、暗くならないで」

『……わかりました』

どうやら納得したようだ。

声が暗く聞こえたりはしなかった。

(そろそろ続きを話そうかな)

と思ったのだがやっぱりやめた。

今は気にしてないと言ったがやっぱり話し始めると、少し胸が苦しくなる。

この子に知ってもらいたいと言うのは嘘ではない。

けれどももう少しだけ休んでもいいだろう。

(許してくれるよね?)

心の中で私は呟くとベッドに寝転んだ。

そこでの僅かな時間はゆったりとした心地よいものだった……

第九話（後書き）

まず最初に、投稿がいつもより遅れてすみませんでした!!!
インフルエンザにかかったしまい倒れていました。

……辛かったです（涙）

さて小説の話に移りますが、今回はリリースの過去について書きました。

ちよつと中途半端な感じで終わっていますが、これ以上書いてると以前もありましたがいつもより長くなってしまうそうだったので一度ここできりました。

不満があつたらすいません。

では今回はここらへんで終わりにしときます。

あと活動報告のほうに悩んでいることを書いたのでもし気が向いたら答えてくれると助かります。

それでは今回はここで失礼します。

次回をお楽しみに！

第十話

「そろそろ続きを話そうか？」

『はい、お願いします』

ベッドに横になっていた私は体を起こした。

少しだけではあったが休んだ分、胸の苦しみは落ち着いた。

多分もう大丈夫だろう。

私はゆっくりと昔の話を思い出しながら再び話し始めた。

私が昏睡状態から目覚めてからというもの、私の家族は毎日病室に来てくれた。

家族全員で来れない日もあったが誰も来てくれないという日はなかった。

ただお姉ちゃんだけは、一日も欠かさずに来てくれていた。

お姉ちゃんが通っている学校はここからはかなり遠い場所にあることを私は教えてもらっていた。

つまりここに来るのは決して楽ではないのだ。

でもお姉ちゃんは毎日疲れた顔も見せず、元気にお見舞いに来てくれた。

私にとってそれはとても嬉しいことだった。

こんな感じで私は充実している入院生活という不思議な日々を送っていた。

だからなのだろう。

充実していたからこそ退院できる日はあつという間にやってきたように感じられた。

そして病院から出る日、私は大勢の看護師や看護婦に見送られているのは今でも覚えてる。

私はそこで目覚めることが出来たのは奇跡だったのかもしれないと思ひ、もし本当に奇跡ならそれを与えられたことを感謝しなくてはと思った。

私たちは見送られながら病院を後にし、とある場所へと向かった。

向かう場所なんて決まっている。

もちろん私たちの家だ。

どんな家なのかは知らないし、正直に言えば家のことなんてどうでもよかった。

一番大事なのはそこで私が家族と一緒に過ごせるということだから。病院をでてから数十分たったころ、乗っていた車は唐突に止まった。車から降りると目の間には家がたくさん建っていた。

住宅街のような場所だから当然なのだが、私はその中で一つだけ他より大きめの家が目に止まった。

同時に私の家はそれはなんだと言われてもいないのに何故かわかった。

案の定、家族の皆に連れられ私はその家の中へと入って行った。

中へ入ると私はまずこう思った。

……懐かしい。

家の中のどんな光景を見ても懐かしいと思った。

中でも一番懐かしいと思ったのは、一つの部屋だった。

部屋自体はもしかしたら少し殺風景に見えるかもしれない。

これたてて装飾品があったり可愛いと言えるような服がたくさんあったりするわけじゃない。

ベッドの横に少しのぬいぐるみや漫画本が置いてあったり、机の上にはオルゴールがいくつか置いてあるだけだ。

子供らしくない部屋に見えるが、それでもこの部屋に私は一番の懐かしさを感じた気がした。

ここは私の部屋なのだとそこで初めて私は理解した。

寂しく見えるこんな部屋でも不思議と心地よかった。

……なのに私は、涙が止まらなかった。

心地良いと思つた瞬間から涙が溢れてしまった。

泣いている理由は自分でわかっていた。

心地良い部屋だけど、懐かしくも寂しそうな印象を受けるこの部屋からどんな子が過ごしていたのかわからない。

自分の部屋なのに自分がどのように過ごしていたのかわからないのだ。

記憶喪失だからしょうがないのかもしれない。

だけど自分が過ごしていたはずの場所を見ても、過去の自分がどういう人間だったのかが全くわからないことが私にとって凄く辛かった。

だから泣いていた。

それから私はお姉ちゃんが様子を見に来るまで部屋の真ん中で泣いていた。

私はお姉ちゃんに慰められながら、少しづつ自分が泣いていた理由を話し始めた。

それを聞いたお姉ちゃんは優しく私のことをあやすようにしながら色々なことを話し始めた。

全部私についてのことだった。

どういふ性格だったのかどういふ生活を送っていたのかなど、一度は聞いたものもあつたが丁寧に教えてくれた。

そんなお姉ちゃんの心づかいがとても嬉しかった。

気付けば私は泣きやんでおりお姉ちゃんが話すことを夢中で聞いていた。

ある程度一通り話し終わるとお姉ちゃんは最後にこんなことを言った。

「リリース、ここまで話しておいて無責任かもしれないけど聞いて。これはあくまで私から見たリリース。これがどういふ意味かわかる？」

この時の私はすぐにはわかるとは言えなかった。

お姉ちゃんから見た昔の私と、本当の昔の私が一緒であるかどうかはわからないということなのだろうが、それを認めることは怖かった。

それでも私は少しの間を空けわかると答えた。

お姉ちゃんは私の答えに満足そうにして再び話し始めた。

「賢いね、リリス。それでね、ここからは私の予想んだけど聞いてくれる？」

私は今度は間を開けずにうん、と答えた。

「自分のことは自分自身にしかわからない。私はそう思ってるの。つまりね昔のリリスのことは今のリリスじゃないとわからないんじゃないかな？」

私は何も言えなかった。

お姉ちゃんが言っていることはわかったけど、私は記憶がない。

昔の自分がわからないとさっきまで泣いていたぐらいなのだ。

なのにお姉ちゃんはどうしてこんなことを言うのだろう。

私の疑問を伝えるとお姉ちゃんは再び優しく話し始めた。

「リリスに記憶がなかったとしてもね、私はリリスの本質は変わってないと思う。だったら時間をかければきつとわかるはずだよ？」

私の本質……

そんなの知らない。

だってまだ目覚めて記憶を失っていることに気付いてから一ヶ月もたっていない。

それだけの時間しかたっていないのに自分の本質を見つけることなんて出来るとは思えない。

そこで私はふと思った。

言い方は変かもしれないが、私はまだ自分がどのように生活しているのかすら知らない。

だって家族と一緒に家で過ごすのは記憶を失ってから初めてだから。ならば時間をかければわかるかもしれない。

自分の生活に慣れてくれば、自分のことがわかるかもしれない。

私はきつと早すぎたんだ、昔を知ろうとしたことが……

お姉ちゃんもそれを教えようとしてくれたのかな。

そのことを聞いたがお姉ちゃんは誤魔化すだけで教えてはくれなかった。

私は勝手に自分の予想は正しいと思うことにした。

ようやく私もこの頃になって落ち着いてきた。

私がこの部屋に入ってきた時はまだ明るかったが、気付けば外はもう薄暗かった。

かなり話しこんでしまっていたらしい。

まあ、私が泣いていたりして話あまり進まなかったというのもあるかもしれないが……

私とお姉ちゃんはそれから特に何もすることがなく二人してのんびりしていたが、お母さん達から呼ばれるまでそんなに時間はかからなかった。

私たちは一緒にリビングに行くと一目で御馳走だとわかるだけの料理が並んでいた。

真ん中にはケーキまで置いてある。

そのことから誰かの誕生日なのかと予想はできたが誰のかまではわからなかった。

お母さんとお父さん、それとお姉ちゃんから

「「「リリース、11歳の誕生日おめでとう」「「「

そう聞くまでは……

三人からすれば私の誕生日を祝うなんて当然のことなのかもしれない。

けれど私は違う。

今の私にとって、誕生日を祝ってもらうなんて初めてのことだ。

ゆえにもうとまったと思った涙が再び溢れ始めた。

さつきまでの辛い涙とは違い、今度のは嬉し涙だったが。

この時、私は密かに心に誓った。

絶対にこの家族と幸せに生きていく、それが私にできる恩返しだから……

その日を境に私は何より家族のことを大切に思いながらも普通の生活をしていた。

学校に通い勉強したり、友達と遊んだり、家の家事をしたり、家族との触れ合いを楽しんだりと本当に普通の生活を送っていた。

記憶が戻る気配などもなかったが、気付けば昔の自分にそこまでこだわることもなくなっていた。

もちろん知りたいたとは思っているが、どうしても戻りたいとまでは思わなくなっていたのだ。

多分私が幸せだと言える生活を過ごしてきたからだろう。

私はこのまま何事もなく時間が過ぎていくものだと思っていた。

こんな幸せな時がずっと続くものだと思っていた。

私の13歳の誕生日を迎えるまでは……

『マスター、大丈夫ですか？ 顔色がよくありませんが』
ひとまずきりのいいとこまで行っただとこで、エターナルパルスは心配そうに言った。

心配されている本人である私は大丈夫だと思わせることにした。

「どこも悪くないから大丈夫。心配掛けてごめん」

私は笑って返したが本音を言うならば胸が苦しかった。

それもさつきより酷い。

『マスター、休憩しましょう』

気を使ってくれたようだが私は断ることにした。

「大丈夫だから。続きを話すよ」

『いえ、勝手なのですが私が少し疲れてしまったので、少し休憩が欲しいのです』

……嘘だっことはすぐにわかった。

この子は異常があったりしても私のことを第一に考えるような子だ。

それなのに自分が疲れたなんて言うはずがない。

しかしそうまでして止めようとするってことは、相当顔色が悪く見えたとのかもしれない。

少し休憩したほうがいいのかもしれない。

「わかった。少し休もうか」

『ありがとうございます』

私はこの子に嘘にのることにした。

すぐにそれが正解だったということに気付かされた。

胸の苦しみが少しずつ落ち着いてきたからだ。

私は心の中でこの子に感謝した。

再び訪れたゆつたりとした心地よい時間。

いつまでもこんな時間が続けばいいのにな、などと思いつつながらのんびりと味わっていた……

第十話（後書き）

今回で過去話は終わらせようと思ったのですが、思った以上に長くなってしまいそうになったので今回もちよつと中途半端なところで一回切ることにしました。

楽しみに待っていてくれる方は今度こそ次で終わらせるので楽しみに待っていてください。

それでは今回はこのらへんで。

また、第十一話でお会いしましょう。

第十一話

「マスター、私は充分休めました。そろそろ続きを話してもらっても宜しいですか？」

その声を聞いて時間を確かめてみると一時間ほどもたっていた。

私の心を落ち着かせるだけの時間はとれただろうと思ってこのタイミングで聞いてきたのだろう。

……ちょうどよかった。

私も今から話し始めようとしたところだったからだ。

「わかった。それじゃあ、聞いて」

『はい』

返事を聞くと私はまた昔のことを思い出しながら話し始めた……

私の13歳の誕生日まであと三日というところまで近づいてきた頃、両親から唐突にこんなことを言われた。

「リリースの誕生日、祝ってあげることが出来ないかもしれない」

二人は共働きでこの時期は忙しいことは知っていた。

夜遅くまで私とお姉ちゃんの二人だけで家にいることも少なくともなかった。

だからなんとなく予想はしていたが改めて聞かされると落胆はした。

それでも親に迷惑をかけたくないという気持ちから私は攻めることもせず「大丈夫だよ」と言った。

それでその話は終わるはずだったが、一人だけ納得できていないものがいた。

「どういうこと、それ？」

お姉ちゃんは苛立っているような口調で続けた。

「リリースの誕生日だけはこれからも絶対に祝おうって言ってたじゃない！なのに、どういうこと！！」

そんなやりとりをしていたなんて知らなかった。

私がそんなことを呑気に考えている間もお姉ちゃんの怒りは収まらない。

「リリースがどれだけ苦しい思いをしているか知らないわけじゃないでしょ。なのに、どうしてそんなこと言えるのよ！！」

両親は悲しそうな表情をしながらも何も言わなかった。

私も何も言えなかった。

今のお姉ちゃんの言葉を聞いた両親が、もしかしたら予定を空けて誕生日を祝ってもらえるかもという微かな期待をしてしまったから一度でもそんな思いを抱いてしまった私がお姉ちゃんを止めることなんかできなかった。

「どうして、何も答えないのよ！」

お姉ちゃんはそれだけ叫ぶと自分の部屋へと戻ってしまった。

後に残された私や両親は何も話さず茫然としていた。

ほどなくして私はお父さんから一言だけこう言われた。

「すまない、リリース」

続けてお母さんからこう言われた。

「私がこんなこと言うのはおかしいかもしれないけど、あの子をお願い。リリース」

私は何も言わず自分の部屋へと戻った。

その前に一度お姉ちゃんの部屋に行ったが部屋に鍵が掛かっている入ることが出来なかった。

楽しみにしていた日がもうすぐなのに私の心は晴れなかった。

その日はそれから私は誰とも話さず気付いたら眠ってしまっていた。

次の日、私が起きた時には親は二人ともすでにいなかった。

まだ時間は六時前だというのに。

私が不思議に思っているリビングのテーブルの上に手紙が一つあった。

そこに書かれている内容は、今日と明日は仕事の関係で家には帰れないというものだった。

それから少ししてお姉ちゃんも起きてきてその手紙を読んだが特に何も反応を示さなかった。

とりあえず私たちはすぐに朝食を用意し始めた。

親が朝早くに家を出る時は二人でこうしているのだ。

だが今日は少し違った。

お姉ちゃんが何も話さないのだ。

いつもなら私が困るぐらいに話しかけてるぐらいなのに今日に限って黙っていた。

少し気まずく思いながらも私たちは淡々と料理を作っていた。

そして出来上がり食べ始めたところにようやくお姉ちゃんは口を開いた。

「ごめんね、リリース」

「えっ？」

どうしてお姉ちゃんが謝るのかわからなかった。

「昨日いきなり怒りだしてリリースに不愉快な思いさせたかなと思って」

「気にしてないよ」

「本当に？」

「本当だよ」

「そう、良かった」

お姉ちゃんは安心したのか少しほっとした表情をしていた。

それを見ていた私は悪いと思いつつも、いつもこれくらい大人しくしていたら疲れることもないんだろうなどと思った。

だが次の瞬間、そんな思いはあっさりと打ち砕かれた。

「ねえねえ、リリース！ 誕生日に何か欲しいものある？ それともどっか思いでになりそうな場所に行くのもいいかな？ どう、リリース！！」

突然お姉ちゃんは元気になってこの場が騒がしくなった。

私は少しは落ち着いてほしいと思いつつも、やっぱりお姉ちゃんはごうやう騒がしいほうがらしいなと思った。

結局この日の朝には決まらず、また夜に話しあうことになった。

私は学校、お姉ちゃんは仕事があり、昼は話せないからだ。

そして夜に話したら話したで意見が出過ぎて決まらず、結局次の日の朝に決めることになった。

そして次の日の朝も決まらず夜に話しあい、そこでも決まらず最終的な結論が当日の気分を決めようってことになった。

いいかげんだと思うかもしれないが、決まらなかったのだからしょうがない。

それに私はお姉ちゃんと一緒に過ごせるだけで満足なのだ。

だからこの結論にも文句などはなかった。

そしてようやく迎えた私の誕生日。

私はいつものように朝早く起きていつものようにリビングに向かった。

そこにはいつものようにお父さんとお母さんがいた。

「おはよう、リリース。休みなのに早いな」

「リリスの分もあるから食べる？」

驚いていた。

今日は朝から仕事で帰ってくるのも遅いはず。

なのに二人はそこにいた。

「どうして。今日は仕事じゃないの？」

二人は微笑みながら答えた。

「仕事ならなんとか一昨日と昨日で終わらせてきたんだ」

「今日はリリスの誕生日。ちゃんとお祝いしないといけないわよね」

私はそれを聞いてまず最初に思ったことはお姉ちゃんに対する感謝の気持ちだった。

お姉ちゃんがあの時、あんなふうに言ってくれなかったら今この場に二人はいなかっただろう。

後でちゃんとお礼を言っておくべきだろうと思った。

それから少ししてお姉ちゃんも起きてきた。

最初の反応こそ私と同じで驚いていたが、すぐに切り替えてこれからどうするか話しあおうとなどと言い出した。

お父さんとお母さんはその言葉を聞いて考え始めたが私だけは違っ

た。

家族全員がそろっているなら私は行きたいところがあるのだ。

学校行事で一度だけ行ったことがある山だ。

別にそんなに有名な場所ってわけでもないのだが、その山の山頂にちよつとした野原になっている場所がある。

そこから見た景色は私が見てきた中でも一番と言えるぐらい美しく綺麗なものだった。

だからいつか家族皆でもう一度見に行きたいと思っていたのだ。

私はそのことを他の家族に伝えるとそこに行くことがすぐに決定した。

それから私たちの行動は早かった。

すぐに色々な準備を素早くすませ、お弁当なども作ったのに自動車で家を出るまで大して時間はかからなかった。

出発してからすぐ私は今から向かってる場所がどんなに素敵な場所か細かく説明した。

それを聞いた他の皆が少し意外そうにしていたのは、普段はどちらかというとな口な私が自分からよく話しかけているからだと思う。

私はそれだけ家族皆で誕生日を過ごせることが嬉しかった。

そしてこうやって家族皆で一緒にいれるという現実が幸せだった。

……なのはどうしてなのだろう？

……どうしてこの世界は私を追い詰めるのだろう？

それは突然のことだった。

その時は少し狭い山道を走っていた。

そして何の前触れもなく巨大な岩が目の前に転がり落ちてきた。

車はそのまま、岩に

私の記憶は何故かここで途切れている。

私が次に覚えているのは岩の上で目をさました記憶だ。

何が起きたのか私はわからなかった。

私はひとまず立ち上がろうとした。

だが突如襲った激痛によりそれはかなわなかった。

良く見れば自分の体はあちこちが傷だらけで酷い姿だった。

私はそこでなにげなく隣を見た。

倒れているこの態勢じゃよく見えないが誰か倒れていることだけは見えた。

私は痛みを我慢して今度こそなんとか立ち上がった。

そこでもう一度、同じほうを見た。

そこにはお父さんもお母さんもお姉ちゃんもいた。

みんなそこにちゃんとした。

だけど少し変だった。

どうしてちっとも動かないんだろう？

どうして傷口からたくさん赤い液体が流れているんだろう？

お姉ちゃんに至ってはどうして右腕がないんだろう？

そしてどうして私は涙を流しているんだろう。

「うそ、だよな？ はやく、おきて」

皆ただ眠ってるだけ。

だから起こさないと。

私はゆっくりと近づいて、皆の胸に手を当てた。

全員、心臓が動いていなかった。

「いやあああああっつ！ー！ー！」

気付いた時には叫んでいた。

喉が潰れるんじゃないかって思うぐらい叫んでいた。

「おきて！ おきてよー！」

私の叫びに反応するものはなく、家族皆は赤い液体をただ体中から流したまま動くことはなかった。

「おきて……こんな、の、嘘だって……言つてよ……」

私は徐々に声が出せなくなっていった。

私だって酷い怪我を負っている。

にもかかわらず暴れたり叫んだりしていれば、すぐに体は限界を迎えてしまうのは当たり前だった。

「ゆめ……なら、さめて……」

私はそこで倒れこんだ。

意識が徐々に無くなっていくなか、私は少女のような声を聞いた気がした……

私が次に目を覚ましたのはベッドの上でだった。

ここが何処なのかわからなかった。

とりあえず辺りを見渡そうと体を起こそうとしたが、酷く傷ついた私の体は少し動かさそうとただだけで酷く痛んだ。

なんとか我慢して起きてみると、部屋の様子からここは病院とはちよつと違うような気がした。

私がそんなことを考えていると、部屋の扉が開いてそこから一人の少女が現れた。

優しそうな印象を受ける子だった。

「目が覚めたんだね。よかった」

少女は安心したような様子だった。

だがそんなことはどうでもいい。

この少女には聞きたいことがあった。

「ここは何処？ どうして私はここで寝ていたの？」

少女は悲しげな表情をするだけで何も答えてくれなかった。

「どうして、何も答えてくれないの？」

少女はやはり答えてくれなかった。

私は何故か少しずつ不安を感じ始めた。

私はもう一度だけ聞いた。

「ねえ、ここは何処？ どうしてここで寝ていたの？ お願い、答えて！」

「覚えて、いないの？」

少女はようやく答えてくれたが、言葉の意味がよくわからなかった。

覚えていないとはどういう意味？

私は何か忘れているのだろうか？

そこまで考えた時、私は頭の中に嫌な光景が浮かんだ。

それは家族皆が傷だらけになって倒れているというものだ。

こんなのあるわけがない。

この少女に聞けばわかることだ。

だから私を希望を信じ聞いてみた。

「お父さんと、お母さんと、お姉ちゃんは、何処にいるの？」

少女は酷く辛そうな表情をして答えた。

「ごめんね……助けて、あげられなくて……」

この言葉の意味がわからないほど私は鈍感ではない。

つまりこの頭の中にかぶ地獄のような光景は真実だということだ。
今にも叫んだり暴れだしたりしたかった。

なにもかも滅茶苦茶にしたかった。

けどそんな思いに反発するかのように私の体は動いてはくれなかった。

……何もかもが嫌だった。

事故のことも家族のことも自分だけが生きていることでさえ嫌だった。

その時たまたま机の上にあった果物ナイフが目にとまった。

今の私にとってそれはとても魅力的なものに映った。

「ねえ、これで自分の首を切ったらどうなるかな？」

どこか他人事のような口調で私は狂ったことを口にしていった。

それを聞いた少女は当たり前のような答えを出した。

「何を言ってるの！ そんなことしたら貴女が死んじゃうよ！」

少女の言葉は私にとってとても素敵な言葉に聞こえた。

だって死ねば私は皆のもとへと行くことが出来るんだから。

「……………そう。だったら、迷う必要なんて、ないよね？」

私はそれだけ呟くとナイフの切っ先を自分の首に向け突き刺した。

……………いや、正確には突き刺そうとした。

そのナイフは私の首に届く前に少女によって抑えられていた。

「どうして、邪魔をするの？」

「どうして、そんなことするの！？」

少女は手のひらから血を流していた。

ナイフの刃なんか握れば当然だろう。

だが少女はそんなこと気にする様子もなく必死に私に向かって呼びかけてきた。

「せっかく助かった命なんだよ！ どうしてそんな簡単に捨てようとするの！ そんなことしたって貴女の家族さん達は喜ばないよ！」

……………この少女の言うとおりだろう。

私の家族がここにいたら同じようなことを言おうと思う。

だけど私はこの現実には耐えられるほど強くない。

それを伝えたところでこの少女は納得しないだろう。

だから私は別のことを伝えた。

「そこまで言うなら、私に生きる理由をちょうだい。この苦しみが
ら逃れられるだけの理由を……」

そんなものあるはずがない。

この場に家族の誰でもいい、たった一人でもいれば別なのかもしれ
ないが、それは叶わぬ望み。

他に私が思いとどまる理由なんてあるはずがない。

案の定この少女は何も答えなかった。

「……ないなら、話はこれで、おしまい」

私はそれだけ告げナイフに力を入れた。

まさにその瞬間だった。

「……あるよ」

少女ははっきりとそう口にした。

「私は貴女と、友達になりたいんだ。それで貴女の苦しみも一緒に
分け合っていきたいと思ってるの」

「……なにを、いって？」

「それでいつか、私が貴女にとって大切な人になってみせる。そんな希望を信じてみれば、それが生きる理由にならないかな？」

この少女の言っていることはなんとか理解出来た。

孤独である私にとってこの提案は、悔しいが少し嬉しいと思った。

見ず知らずの相手である私に向かって、こんなことを言える人なんて多くはいないだろうから。

けれどどんなに上手いことを言っても、この少女は他人であることには変わらない。

いつか私を裏切るかもしれない。

希望はいつだって裏切られてきたから。

だから聞いてみた。

私の思っていることを……

「もしそれが、生きる理由に足りないと思ったら、貴女はどうするつもり？」

少女は今度は迷わず答えた。

「貴女のすきにしていいよ。もし命が欲しいっていうなら、少し怖いけど言つとおりにするよ」

……この少女は何を言っているのかわかっているのか？

自分の生きる権利を、私なんか譲ってもいいなど言ったのだ。

たかが一時間も話していない相手に。

「どっ……して？」

この少女はこんなことをどうして言えるのだろうか？

一度でもそう思ってしまったら、知りたいという思いが止まらなかつた。

「貴女と私は何の関係もないのに、どうしてそこまで言えるの？
ねえ、どうして!？」

「……孤独を知っているから、かな」

その時の少女の表情は少しだけ暗かった。

「私は家族を亡くしたことがあるわけじゃないけど、一人ぼっちの苦しみはわかっているつもりだよ。だからそんな苦しみは誰にもあじわってほしくないの」

少女は真剣に話を続けた。

「貴女を助けてあげたいの。私ができることならなんでもするから」

「……自分の命をかけてでも？」

「うん」

少女が頷いた時の眼は、どこまでもまっすぐだった。

迷いがなく地震に満ち溢れているような、そんな印象を受ける眼だった。

そこで私は気付いた。

この少女は最初から死ぬつもりはなかったのだらう。

私を助けだすことに絶対の自信をもっているから。

そのため迷いもなく、自分の命を渡してもいいなどと言えるのだ。

……ここまで言われて屈しない人がいたら、それは心が穢れているのだらう。

生憎と私はそこまで心が穢れているわけではない。

だからもうこの少女を悲しませるような行為は出来なかった。

「……ねえ、貴女の名前は？」

「えっ？」

「名前だよ。友達になるのに、知らないって変だから」

その言葉を聞くと少女は涙ぐみながらも嬉しそうに答えた。

「私の名前は、高町なのは！ なのはだよ」

「私は、リリス・フェイラーゼ」

「よろしくね、リリスちゃん！」

そう言うとなのはという少女は、左手で私の手をしっかりと握っていた。

その時、つい目に入ってしまった。

右手から血が垂れていることを。

「右手、ちよつとみせて」

私は返事を聞く前になのはの右手を見てみると、思っていたより傷口が深いのか出血が少し酷かった。

「ごめん、こんな傷を負わせて」

「気にしないで、大丈夫だから」

そうは言っても出血の量から考えて、あんまりほつとくのも良くない気がする。

「私のことはいいから、なのははその傷の手当てをしてきたほうがいい」

「でも……」

なのはは私を一人にするのが心配だと言っているような表情をしていた。

……なのはは優しすぎる。

優しいこと自体はいいしれないけど、自分のことより相手のことばかり考えるのはどうかと思う。

私のことを思ってくれるなら、自分のことを大切にしてほしい。

「えーと、リリースちゃん。気付いてる？」

「……何が？」

なのはは少し顔を赤くしながら、少し困ったような表情をしていた。

「どうしてかはわからないけど、リリースちゃん念話が使えてるの。

それでね、いま考えていたことが全部伝わっちゃってるんだけど……

……」

「……全部？」

「……うん」

なんだろう、ものすごく恥ずかしい。

ここまで恥ずかしいと思ったことはないかもしれない。

顔も何だか赤くなってる気がする。

とりあえず、もう何も考えないようにしないと。

「リリースちゃんにこれ以上、心配掛けるのも嫌だから治療してくるね」

「わかった」

「それじゃあね。リリースちゃん」

そう言うとなのはは出て行った。

私は一人この部屋に残された。

そこで私は心の中でこう呟くことにした。

（お父さん、お母さん、お姉ちゃん。これで、良かったんだよね？）

そっだよ、そんな声が聞こえた気がした。

私はそのまま急に襲ってきた眠気に身を任せ再び眠った。

次に目覚めた時は、目の前になのはがいた。

「あっ、起きたんだね」

なのはは嬉しそうに声を出した。

「うん。おはよう」

少し寝ぼけながら私は返事をした。

もう少し寝ていたい気分だったのだが

「ねえ、リリースちゃん。大事な話があるんだけどいいかな？」

こんなこと言われたら寝ていたいなどと言えるはずもなく、話を聞くことにした。

「話って、何？」

「リリースちゃん、私と一緒に時空管理局で働いてみない？」

あまりに唐突すぎることですぐに返事を返せなかった。

すこし時間をおくとようやく言葉の意味は理解出来たが、代わりに色々な疑問が出来た。

「……私の魔法の才能なんてないし、時空管理局って何をすればいいのかよくわからない」

なのは私の疑問に一つ一つ細かく説明して言った。

だがおかしな点もあった。

時空管理局の仕事内容はわかった。

けれど私の魔力量がAAAランクに匹敵するほどとはどういふことだろう。

これでも魔法というものに興味はあって、個人的に魔力というのはどういうもののかななどを調べていたことがある。

そのおかげである程度の知識はもっている。

だからこそわかる。

あくまで魔力量だけだがAAAランクと言ったら管理局でもそうはいないはず。

何故それだけの力を私は持っているのだろう。

……まあ、考えても答えは出ないだろう。

私のことなのだから私がわからなければそれまでだ。

深く考えるのはやめよう。

むしろ力があるなら、それを効率よく使うにはどうすればいいか考えよう。

「それで、どうかな？」

なのはは心配そうに聞いてきた。

私の答えはもう決まっている。

「……私で役に立つなら、いいよ」

この瞬間から私は時空管理局に所属することが決まった。

もちろんすぐにはいかない。

まず最初に怪我を治す。

その後は時空管理局というものを知るために色々と学ばないといけないのだから。

「頑張つてね。リリスちゃん」

それからというものの月日はあっというまに過ぎて行った。

私が管理局に所属するまでなんだかんだで、半年以上もかかってしまった。

それというのも色々と覚えることが多すぎたのが原因なのだが。

それはそうとして、私は管理局で働く初日、早朝になのはに用事があると呼び出された。

言われたところに行くところには、メンテナンス室だった。

どうしてこんなところに呼び出されたのか不思議だったが、とりあえず私は中に入った。

そこではなのはが出迎えてくれた。

私はなのはにとりあえず気になったことを聞いてみた。

「なのは、どうしてこんなところ？」

「これを、渡すためだよ」

なのはに手渡されたのは、銀色のひし形の宝石だった。

「これは？」

「リリースちゃんのデバイスだよ」

「私の？」

「うん。後はリリースちゃんが、この子を決めるんだよ」

「……わかった」

私はイメージする。

形や使い方、そしてこの子の名前を。

そして私は告げる。

「エターナルパルス、セットアップ！」

その声を合図にこの子は起動した。

そしてこの後の会話は一生忘れることはないだろう。

『初めまして、マイマスター』

「こちらこそ、初めまして。エターナルパルス」

『早速なのですが、一つだけ私からお願いがあります。よろしいでしょうか？』

「いいよ。なに？」

『私は貴女のことを知りたい。ですから教えてください。これから永遠に守り続ける貴女のことを……』

「ここから先はもう話さなくても知っているはずだよ」

私はそう言つと昔話を終わらせた。

エターナルパルスは何も言わずただ黙っていた。

それを私は不思議に思った。

「どうかしたの？」

『……すみませんでした。辛い過去を思い出させてしまつて』

「私は大丈夫。だって今と言う時間が幸せだから。だからエターナルパルスも気にしないで」

『……わかりました。お話頂きありがとうございます』

「どういたしました」

その時タイミング良く私のお腹はが鳴った。

気付けばもう夜で夕飯を食べるには少し遅いぐらいだ。

どうしようかと考えたが、今から何かを作る気にもならなかったの
で何か買ってくることにした。

そのついでに夜の散歩に行くのもいいかもしれない。

そんなことを考えながら私はエターナルパルスを手にとって、自分
の部屋を後にしたのだ……

第十一話（後書き）

みなさんお久しぶりです。

少し時間がたつてしまいましたが地震の影響などは大丈夫でしょうか？

こっちの地域はさほど被害が出なかったので幸運でした。

まあ、自分に関しては地震によりパソコンが机から落ちて故障という事態に陥ったりなど、被害は甚大だったのですが……

まあ、そんな暗い話はやめて小説の話に移りますが、ようやくリリスの過去が書き終わりました！

まあ、いままであまり長くならないように途中で切ったりしていたのに、今回はかなり長くなってしまいました。

……少し反省しています。

今回の話でリリスの辛い過去がようやくわかりましたね。

本当なら最初から最後までシリアスでいきたかったのですが、途中でほのぼのとしたところも入ってしまいました。

まあ、これはこれでいいかも思ったりしているんですが……

それでは、今回はこちらへんで終わりにします。

楽しみに待っていてくれた方、一ヶ月も更新できずすいませんでした。

それでは、また十二話をお楽しみに！

第十二話（前書き）

かなり悩みましたが、新キャラを出すことにしました！
この話の最後の方に、少しだけですがもう出てきます。

第十二話

「うーん……眠い……」

『マスター。辛いかもしれませんが、頑張ってください』

「はぁ……わかってるよ」

私はため息をついた。

今の時間は午前三時。

いつもなら完全に熟睡している時間だ。

にもかかわらず私は眠気と戦い、机に向かい必死に考え事をしていった。

何故こんな時間にそんなことをしているのか、それは全てはやてによる一言によるものだった……

夕食を外で買ってきた私は途中でなのはとはやてに偶然出会ったことがきっかけで、外のベンチで食事を済ませていた。

そこまではなんの問題もないはずだった。

だが食事をすませ部屋に戻ろうとした時、はやてはとんでもないことを言い出したのだ。

「そういえば、リリスちゃん。もう明日やけど、副隊長としての挨拶はもう大丈夫？」

私は凍りついたように立ち上がろうとした態勢のまま止まった。

「……なんのこと？」

「えっ？ 今の言葉通りやけど……」

「……そんなの聞いてない」

「なのはちゃんから、聞いてない？」

「ふえっ！？ 私は話してないよ。だってはやてちゃんがやっぱり自分から話すって言ってたから」

どうしてだろう？

凄く嫌な感じがする。

背中にも変な汗をかいてきた。

「えっと、つまりリリスちゃんは何も知らないと？」

「うん、知らない」

辺りが静けさに包まれた。

先程までは三人で楽しく話してたのに今は全くそんな雰囲気ではな

かった。

「……はやてちゃん、どうするの？」

なのはの言葉はそれだけで人を凍りつくすように冷たかった。

「えっと、どないしょ？」

「はやてちゃん！！ そんな冗談を言ってる場合じゃないでしょ！」

「じよ、冗談やないんやけど……」

「だったら尚更悪いよ！」

「堪忍してや〜。それでリリースちゃん。ここは無理を承知で言うんやけど明日までに挨拶を考えねへん？」

「……本気で言ってる？」

「うっ、本当に堪忍や〜！」

「あっ、はやてちゃん！ 逃げちゃダメ！」

「ちよ、ちよっと待って！ 二人とも！！」

待つはずもなくそのまま二人は走り去ってしまっていた。

私はその場に残され一人佇んでいると、今の状況がかなりまずいのではないかと思いはじめた。

「……どうすればいいと思う？」

私は自分の愛機に向かって問いかけた。

微かな希望を抱いて。

『……急ぎ部屋に戻るべきかと思えます』

この瞬間、希望は打ち砕かれたのだった。

こんなことがあり、こんな時間まで考え事をするようになったのだ。

そもそも私はこんな経験をしたことがない。

だから何を話せばいいのかわからない。

そんな私が良さそうな案が簡単に出るはずもなく、未だに全くと言っていいほど考えはまとまっていなかった。

さらに情けないことに疲れが溜まっているからか、眠気が酷く今にも眠ってしまいそうだった。

(……こんな気分じゃダメだな)

ここで私が弱気になっても意味はない。

今やるべきことは一刻も早く新部隊の挨拶を考えることだ。

私は自分の頬を軽く叩いて気合を入れなおした。

そして再び考え始めたのだが、ここでまたとある問題にぶつかつた。

何を話せばいいのかわからない……

これではまた最初に戻つただけだ。

「はあ……」

私は再びため息をついた。

『マスター、私から一つだけ助言があります』

「助言？」

この状況から抜けられるならどんなことでも聞きたかつた私は大人しく聞くことにした。

『一言で言ってしまうならば、そんなにも悩む必要なんてありませんよ』

「どづついうこと？」

『マスターは難しく考え過ぎです。副隊長としての挨拶など関係なく、マスターが思っているままのことを伝えればいいのです』

「私の思っていること？」

『はい。マスターはこのような立場に立つと決めたまっかけとなつた思いがあるはずです』

私の思い　それは自分を信じてくれているのはたちの為にも、自分にできることがあるならやり遂げたいと思つたから。

それが私の嘘偽りのない思いだ。

『思ひだしたようですね。後はそれを言葉にすればいいだけです。それは副隊長としてのマスターが抱いている思い。充分なものだの思いませんか？』

「……………私は知っていたんだね」

最初からこんなことで時間を費やす必要などなかったことを私は気付かされた。

自分の思いがそのまま悩んでいたものの答えになっていたのだから。

「……………あれっ？」

ふと不思議に思った。

この子はこの様子だと最初からこのことを知っていたようだ。

だったらどうして最初から言ってくれなかっただろう。

「……………ねえ、エターナルパルス」

『最初から助言をしなかった理由ですか？』

何も言っていないのにどうしてわかるのか不思議だ。

そんなに私の考えってわかりやすいのだろうか？

……まあ、気付かれているのなら隠す必要もないだろう。

「教えて」

『最初から私が何もかも言ってしまったらマスターの成長になりません。ですからあえて何も言わずマスター一人に考えさせたのです。これが理由です』

「……理解は出来た」

『その言い方では、納得されてはいないようですね』

「……うん」

この子からしてみれば全て私のためを思っていることなのだろう。

その気持ちは受け取ることにする。

けれど今日は色々あったから疲れがたまっていた。

この子の言ったことを素直に納得できるほど今の私は心が広くはなかった。

『すみませんでした。本当は少し後悔しています。楽ではなかった』

一日を過ごしたマスターに無理をさせたことを……』

……そう思った矢先にこんなこと言わないでほしい。

私は基本的に甘いものだから、こんなことを言われたらすぐに許してしまいたくなってしまつてしまつてはないか。

(でも私がここですぐ許すのは何だか悔しい)

そう思った私は、ささやかな復讐をすることにした。

「……ずるい。そんな言い方」

『すみませんでした』

「はあ……いいよ。許してあげる」

『いいのですか?』

「そんなに怒っているわけでもないから。それにエターナルパルスが弱気になるなんて滅多にないもの。そこまで気にしてるなら許さないのは可哀そうかなって」

『……マスター、一つ勘違いしています。私は弱気になどなっていません。自分が犯した過ちを謝罪しているだけです』

「そう? 私はそう見えただけ?」

『……気のせいです。ですからあまりおかしなことを言うのはやめてもらいたいです』

「わかった。そういうことにしとくよ」

今の私は少し意地悪そうな笑みを浮かべていると思う。

何故なら私の演技で少しだけ焦っているような口調で話しているこの子を新鮮だったからだ。

上手くこの子が焦った様子を出すかどうかはわからなかったが、上手くいったから私的にはよかったと思う。

この子にしてみればあまりいい気分ではないかもしれないが、この程度のささやかな復讐なら許されるだろう。

とまあこの子をからかうのはそろそろやめて、真面目に本題の方を考えた方がいいかもしれない。

さっきまでは話してたからかまだ眠気には余裕があったが、ここに来て本格的に眠くなってきた。

時間を見ればもうすぐ四時になろうとしていた。

これでは眠くなるのは当然だろう。

「寝る時間が無くなる前に、早く決めないと」

『まだお休みにならないのですか？』

「うん。この部隊に対する自分の気持ちを伝えればいいのはわかったけど、それだけじゃ私がどういう人間なのかわからないから、そ

れを知ってもらわないと」

『その様子だともう私からの助言はいらないようですね』

「大丈夫。すぐにまとめられるから」

『わかりました』

私はそれから自分なりにまた考え、とりあえず対して時間もかからずに考えをまとめることが出来た。

今の時間からして眠れる時間は一時間ほどだったが、今の私にはその一時間が貴重なものだった。

これ以上休む時間が無くなる前に私はすぐさま寝ることにした。

こうして日にちは変わってるが私にとっての長い一日は幕を閉じた

……

翌朝、私は思いもよらない人物によって起こされた。

「リリースちゃん。起きて！」

「うっくん、だれ？」

「なのはだよ。起きて、リリースちゃん！」

「なのは……どうして……」

ここにいるの？ そう続けるはずだったのだが、あまりの眠さにそれだけのことを喋るのも億劫だった。

「眠いのはわかるけど、起きて！」

「う、ん。わかった……………すう……………」

「わかったって言って、そのまま寝ないですよ。リリースちゃん！」

（ごめん、なのは。私、目覚め悪いから）

喋るのが億劫だったため、心の中で私はなのはに謝った。

「リリースちゃん。本当に早く起きて！ 時間がないの！」

なのはの声はかなり焦っているように聞こえた。

そして時間がないという意味。

私は眠い目をこすりながら時間を見てみた。

時計に表示されていた時間は、8時50分。

確か新部隊の挨拶は9時からだったはず。

ここから導き出せる答えはただ一つだった。

「ね、寝坊！！？？」

眠気など一気に冷めた。

「リリースちゃん、急いで！」

「わかった！　なのはは先に行つて！」

私はそれだけ伝えるとなのはの返事も聞かず、ベッドから飛び起き最低限は必要な身支度を始めた。

途中なのは何か言っていた気がするが、余裕がなかった私は聞いている暇などなかった。

とりあえず最低限な準備が終わって部屋を出ようとした時、ふと疑問に思ったことがあった。

「……ねえ、エターナルパルス」

『何でしょうっ？』

「どうして起こしてくれなかったの？」

『その問いの答えは昨日もしましたが？』

「……そう、だったね」

予想通りの答えが返ってきて、私は昨日と同じくどうしてか納得がいかなかった。

まあでもこのもやもやとした気分はとりあえず無視しよう。

とにかく急ぐ。

今はそれが何より大事なことだ。

そしてようやく部屋を出ようとした時、ここで私は新たな問題に直面した。

何処に行けばいいのかわからなかった。

でもこんな所で止まってるわけにもいかない。

とりあえず誰かに聞かないと。

(さっきなのはが言ってたことって、このことだったのかも……)

私は人の話を聞かなかったことを少し後悔した。

「あつ、リリスちゃん！ 準備できた？」

部屋を出るとそこにはなのはがいた。

どうやら待っていていたらしい。

「なのはがどうして？」

「さっきの私の話、聞いてなさそうだったから待ってたんだよ。そんなことより急がないと！」

「あつ、うん……」

お礼を言う暇もなくなのはは行ってしまったので私も急いで後に続いた。

そして結果を言うなら、時間には間に合った。

9時ちょうどにはついたのだから、間に合ったと言っても間違っ
てはいないだろう。

ただ誰かを指揮する立場になる人間としては、こんな時間に来るの
は正しいことではないだろうが。

その証拠に私が指定の場所に着いた時、まず最初にヴィータの怒り
の言葉が飛んできた。

「なんで今日みたいな日に遅れるんだよ！ 少しはこれからのお前
の立場を理解しろ！」

「ごめん……」

いい返す言葉もない。

さすがに今日のは許されることではないだろう。

副隊長なんて立場につくものが寝坊して遅れましたなんて洒落にな
らない。

そんないい加減な人間についていくことになれば、新部隊の人たち
はたまったもんじゃないだろう。

私は自分のミスにで少し落ち込んでいた。

「ヴィータ、それぐらいにしとき。今回のリリスちゃんの原因は私にあるんやから、それ以上言うのは可哀想や」

そんな時だった。

はやてが止めに入ってくれたのは。

「はやて？」

「…………ごめんな、リリスちゃん。昨日になっていきなりあんなこと伝えて」

「それは、もう大丈夫だから」

「なら、良かった。それとヴィータの言うことは気にせんでええから。あと部隊の皆には急用で少し遅れるって伝えたから、もう悩まなくても大丈夫やから」

「…………ありがとう」

「礼なんてええよ。もとはと言えば私のせいなんやから」

「そうだとしても、はやてがフォローしてくれたのは嬉しかった。だったら礼を言うのは当然のことだから」

「まあ、そういつことしとこか。それじゃ、皆そろそろ行くところ？」

その言葉に私を除く他の皆が反応していた。

「ちょっと待って。新部隊の人たちって何処に集まってるの？」

私たちが今いるのは少し広めのフロアだった。

小規模な部隊ならこれだけのスペースがあれば充分なはず。

にもかかわらず私がなのはに連れられここに来た時は新部隊の人たちは誰もいなかった。

だから何処にいるのか聞こうとは思ったのだが、その前にヴィータの怒りの言葉が飛んできたから聞いている暇がなかったのだ。

「あつ、そういえばリリースには伝えてなかったね。実は予想より多くの人たちが集まったから場所を変更したんだ」

フェイトの説明を受け私は納得しかけたのだが、ふと思ったことがあった。

ここに治まらないだけの人数が集まったというなら、それはもう小規模とは言えないだけの人数だ。

それだけの人数が集まったとしても本当に経験を積ませることなど出来るのだろうか？

あくまで予想だが、経験のない新人が大勢いたところで捜査が順調に進むとは思えない。

はやては何故、それだけの人数を受け入れたのだろうか？

「何を考えている？」

その声をかけてきたのはシグナムさんだった。

特に隠す必要もないから正直に考えていることを話すことにした。

「なるほど。お前の言いたいことはわかった」

「どうしてもはやてはそれだけの人数を……」

「それだけ新人達が強い思いを抱いているということなのだろう」

「……どういう意味ですか？」

「今回の部隊は事件の捜査を体験させるという名目で新人を集めたが、事件が起こったら捜査だけで済むとは限らない。これがどういう意味かわかるか？」

「……場合によっては、戦闘などもあり得るってことですか？」

「そうだ。事件とはそういう危険性が必ず付きまとうものだ。例えば新人が参加するこの事件にしたってそれは例外じゃない」

「……はい」

「だからこそ主は新部隊の設立を考えたのだろう。リスクが高い分、得るものは大きいはずだと信じてな」

「……そして新人の皆はそれを知っているうえで、この部隊に参加した。そういう意味ですか？」

「ああ。それが私の言う強い思いの意味だ。納得できたか？」

「……正直に言うならば、その考えには少し納得できません。けれど新人の人たちが考えて決めたことなら、私は納得するしかないと思います」

「ふっ、そうか……さて、もう話してる暇はないな」

シグナムさんの言うとおり、もうそんな暇はなかった。

もう目の前には、大勢の人が並んでいる。

その数に私は少しだけ圧倒された。

「皆、待たせて悪かったな。これから私たちからの挨拶があるからもう少しだけ頑張ってや」

緊張感のない話し方に戸惑ったのは私だけではないだろう。

こんな場でそんな話し方でいいのかと思っただが、その話し方のおかげで不思議と緊張感が薄れたのだからまあいいのだろうと思うことにした。

そしてなのは、フェイト、はやての三人の隊長による挨拶が終わり、副隊長のシグナムさんとヴェータも終わった。

そしてようやく私だ。

『マスター。頑張ってください』

「大丈夫だよ」

だから見ててね皆。そしてエターナルパルス。

私は落ち着いた表情で新人たちのほうを向き、ゆっくりと話し始めた。

「皆さん、初めまして。副隊長の任を受けた、リリース・フェイラー
ゼと申します。これから私は皆さんに伝えことがあるので聞いてく
ださい……私はこのような立場にいますが、まだ自分が副隊長とし
て全うできるかと言われれば、自信を持って答えることはできません
ん。ですがそんな自分に、私になら出来ると言ってくれた人がいま
す。その思いに応えたい。私にできることがあるなら自分を信じて
くれている人たちの為にもやり遂げたいと、そう思っています。で
すから皆さん、私のことを信じてください。私はその思いに応える
ために精一杯の努力をし、信じてくれている皆さんに必ず答えませ
から……これで、終わりにします」

私は自分の思いを素直に伝えた。

これで信頼を得られないようなら、私の思いはまだ弱かったとい
うことなのだろう。

だがそんなことを考える必要はなかったようだ。

これだけの大勢の人が、拍手をしてくれている。

私は皆に認めてもらえたようだ。

そして間もなく私たちの新部隊の挨拶は終わった。

「リリースちゃん言葉、凄くよかったよ」

「さすがリリースだね」

「いや、正直ここまでとは思わなかったわ」

「まあ、悪くはなかったぞ」

「お前の言葉は私たちもしっかりと受け取った」

……ここまで言われると、少し恥ずかしいからやめてほしいのだが。
でも褒められたことはうれしかった。

「ありがとう、みんな」

だから私は素直にお礼を言うことにした。

「それじゃ、みんな仕事に戻るで。あつ、リリースちゃんは今日はお休みでええから」

「えっ、どうして？」

「寝不足やる？ だから私が休みにしといた」

その心づかいは、正直かなりうれしかった。

まだ昨日の疲れが取れていないようで、体はかなりだるかった。
休めるなら休んでおきたい。

「それじゃ、リリースちゃん。きちんと寝るんやで」

「……はやてちゃんが言う台詞じゃないと思うよ？」

「そうだよ、はやて。もうこんなミスしないように」

「わかってるって。ヴィータにシグナムも行くで」

「ああ、わかってる」

「いま、行きます」

なのはたち五人はそんな感じで戻って行った。

「ふう。じゃあ、戻ろうか？」

『はい。マスター』

私も部屋に戻ることにした。

その時だった。

視界の端にあり得ないものが映った。

「えっ？」

私は目的のほうへと目を向けた。

他の誰かが見たとしてもそれは、普通の女性に見えるだろう。

だが私にとってその女性は、私のよく知っている人物だからこそあり得ないのだ。

気付いたら私は駈け出していた。

そしてその女性の肩を掴んでいた。

「あっ、リリース副隊長。私に、何か？」

私のしつている人物と声まで同じだった。

私の目の前の女性の顔を良く見た。

綺麗な顔立ちをしている。

髪の色は黒で眼の色はブルー。

本当にあの人と瓜二つだった。

「あの、リリース副隊長？」

「……名前を、聞いても？」

「あっ、はい。アリエス・エスベラントと申します」

「年を、聞いてもいい？」

「今年で15になります」

当たり前だけど、違う。

私の知っている人と名前も年齢も違う。話し方だって違う。

なのに姿形が、声までもあの人と同じだ。

「副隊長。どうかしましたか？」

「……なんでもない。呼びとめてごめん」

「いえ、大丈夫です。それでは、失礼します」

彼女はそのまま戻って行った。

私はその場に残り、気付けば周りには誰もいなくただ一人で茫然としていた。

「どう……して？ あの人、お姉ちゃんと……」

アリエスと名乗った女性は、大切な人と同じ顔をしていたのだ。

そう、お姉ちゃんと同じ顔を……

「アリエスさん。どうして、貴女は……」

それから程なくして私は部屋に戻ってきたが、心が落ち着くことは

なかった。

どうしてなの？

私は部屋で眠りにつくまでの短い時間、その言葉が頭から離れることはなかった……

第十二話（後書き）

ようやく、投稿出来ました……

今までで一番遅くなってしまうと、申し訳ありません……

大学が忙しかったり、ネタに困っていたりしてなかなか書けませんでした。

これってやっぱ、言い訳になるのでしょうか……？

暗い話はここまにして、今回は前書きにも書いたように新キャラが出てきます。

リリスのお姉ちゃんにそっくりなアリエスという女性、いったい何者なのでしょう？

その答えはこれから先まだまだ長いですが、少しずつ書いていきたいと思います。

それでは今回はここらへんにしときます。

第十三話を、お楽しみに。

第十三話

遂に来たか。

頭に響く嫌な声。

もう引き返せはしない。未来は一つに絞られた。

「何を、言っ……」

お前は選んだ。悲劇への道を。

「悲劇？」

愚かなものだ。お前という人間は。

「貴方は、いったいなんなの……？」

お前に恨みをもつものただけ言っておこう。

「恨み……？」

そこである感覚が襲ってきた。

それは私の経験したことがあるものだ。

(夢から、覚める?)

まだ何も聞いていない。

大事なことを聞き出せてない。

にもかかわらず、終わりの時間は近付いてきていた。

もうここで会うこともないだろう。

「どういう意味？ 待って……」

そこで夢は終わりを迎えた。

眼が覚めて私が最初に見たものは、人の顔だった。

その人は心配そうに私を見ていた。

そしてその顔を見て私は咄嗟にこう言ってしまった。

「おねえ、ちゃん……」

「えっ？」

彼女は不思議そうな表情をした。

私は自分の迂闊な一言を後悔した。

「いえ、ごめんなさい。気にしないで。それよりどうして……」

話のそらしかたがわざとらし過ぎるが、そんなの気にしたい暇は

なかった。

「あっ、そうでした。先程リリース副隊長と会話をした時、いささか顔色が優れないようでしたので、訪ねさせていただきました」

だから彼女が素直にこう返してくれたのは、正直助かった。

とりあえず話を続けることに専念することにした。

「どうしてこの部屋がわかったの？ 教えてはいないはずだけど？」

「失礼ながら、高町隊長に教えていただきました」

「そう、だったんだ……」

「……もしかして、ご迷惑でしたか」

「そんなことない。ありがとう、心配してくれて」

「ふう、そう言ってくれると嬉しいな……あっ！ いえ、嬉しいです」

咄嗟に出してしまった話し方。

それが彼女の本来のものだとすぐにわかった。

だから私は彼女に何の悪気もないのにもかかわらず、こんな思いを抱いてしまった。

(……………どうして、お姉ちゃんと同じなの?)

口調も、安心した時にする仕草も、焦っている時に見せる表情も、何もかも同じ。

この人はお姉ちゃんじゃないのに、どうしてこんなに

「あの、リリース副隊長？」

「どうして……？」

もう止まらなかった。

「はい？」

「どうして、同じなの……？」

きっとこの人は何を言われているのかわからないし、これから言いたいという意味もわからないだろう。

でも思いは止まらなかった……

「もう、死んだの。お姉ちゃんは、もうこの世にはいない………
なのに、どうして貴女は！」

私は彼女を床に思いっきり突き倒した。

「いたっ………」

「ねえ、どうして！ お姉ちゃんどうして同じなの！？ 答えて、こたえてよ……！」

「リリース……ふく、たいちょう。どうして、泣いて……？」

「泣いてなんかない！　ないて、なんか……………うう」

私は何をしているのだろうか？

心配して見に来てくれた部隊の人にいきなり叫んだり、痛い思いをさせたり、拳銃の果てには泣きだして、気を遣わせている。

本当に何をしているのだろうか？

(…………馬鹿だ、私)

心の中で自分を責め、そして私は泣き続けた。

どうして泣いているのか、自分でもわからない。

ただ涙が止まらないから、泣き続けた。

そしてどれだけ泣いたのだろうか。

ようやく少し落ち着いた頃、私はそこでようやく気付いたことがあった。

私は、抱きしめられていたのだった。

相手の体温が、とても心地良いものに感じられた。

「落ち着けた、みたいですね」

「……………うん」

私の声はとても小さかった。

それは迷惑をかけてしまった、見苦しいところを見せてしまったなどの罪悪感を感じていたからだった。

（変な人だって、思ってるよね…………？）

突然おかしくなった私を見たのだから、こつ思われるのも仕方ないだろう。

…………でも、それは嫌だった。

何もかも私が悪いのはわかってるけど、この人に変な眼で見られるのは嫌だった。

いや、この人に嫌われるのが怖かった。

だから

「ごめんなさい……………本当に、ごめんなさい。ごめん、なさい……………」

とにかく許してもらえるまでひたすら謝ることにした。

今の私にはこれぐらいしかできないから。

「いきなりこんなことして、不機嫌なのはわかってる。だから、本当にごめんなさい」

「あ、あの？ そんなに、謝らなくても大丈夫です。私が何か気に障るようなことをしたんですよね？」

「ち、違う！ そうじゃ、ないの。私が全部悪い。だから、ごめんなさい」

「えっと、それってどういう意味ですか？」

「貴女が、お姉ちゃんと似てたから……いえ、お姉ちゃんと……同じだったから。それが、信じられなくて……」

「リリース副隊長のお姉さんと私が、同じって言えるぐらいに似ているんですか？」

「そう……でも、だから、信じられなかった。こんなにも、似ている人が、いることを……」

「……不思議、ですね。でも、私は嬉しいですよ」

一瞬、何を言ってるのかわからなかった。

わかった後は、ただ不思議だった。

どうしてそんなことを言うのか？

「嬉しいって？」

「この私がリリース副隊長の支えになってあげられるかもしれないって、思えたからです。今はもういない、リリース副隊長のお姉さんの

代わりに」

「……どうして、お姉ちゃんがいなくなってわかったの？」

「もうお姉ちゃんはいない、先程そう言っていましたから」

「あっ……」

そうだった。

すっかり忘れていたが確かにそんなことを言ってしまった。

気づくのも当然だった。

「リリース副隊長の様子を見た限りでは、お姉さんを失った悲しみは深いことはわかりました。だからこそ思いました。お姉さんの代わりに傍で支えてあげたいって」

「……やめて」

彼女の言いたいことはわかった。

お姉ちゃんとはほぼ同じとも言える人が、傍にいてくれる。

これ以上の支えはないだろうし、とても素敵なことだと思える。

……でも、それはしてはいけないと思った。

「気持ちは、嬉しい。だけど私がそれを望んだら、貴女をアリエスさんという女性ではなく、お姉ちゃんとしてしか見れなくなる。そ

れだけは、許されない」

きっと彼女は自分が伝えたことがこんな結果になることは予想してはいなかったのだろう。

だったら前もって言わなければならない。

彼女が言ったことは私にとって、アリエスではなく姉として見て、と言ったことと同意義だと言っことを。

これで彼女も考え直してくれるって思った。

「それはいけないことなんですか？」

だから彼女の反応に私は驚愕した。

「な、なにを！？ 自分の言ってることわかってるの！？」

「はい。わかっています」

「だったら！」

「わかっているからこそ言っています。私はリリース副隊長の傍でアリエスとしてではなく、お姉さんの代わりとして支えてあげたいと」

今の彼女が本気ならとんでもないことだ。

なにせ彼女はアリエスという自分を捨て、私の姉の代わりとしていることを選んだと主張しているのだから。

「どうして、そんなこと言えるの？ 貴女にだって大切はいるでしょ？」

「……いませんよ。一人も」

怖いぐらいに冷静で自然に答えていたからか、それが本当だと何となくわかってしまった。

ただ納得は出来なかった。

「そんなはずない！ だって友達は大切でしょ？ 両親だって」

「私に友達なんかいないですよ。それに両親は私が嫌いと一緒に住みたくないからって、ずいぶん前にいなくなっちゃいましたから」

「……えっ？」

友達がいない？

両親がいなくなった？

そんな辛くて悲しくて寂しい現実を生きているって言うの？

「だから私には大切な人なんかいません。ゆえに私はアリエスという自分を捨てることを、拒んだりしません。拒む理由が、ないですから……」

彼女は心に傷を抱えていることを私は知った。

そして彼女は自分というものを大切にしていない。

だからアリエスとしての自分を捨てることを躊躇わない。

きっとそれだけ不幸ともいえる人生を歩んできたのだろう。

……そんな彼女に私は何を言える？

自分を捨てるなんてことをこつこつ簡単に言えるのは、それだけ彼女は覚悟を持っているということだ。

ならば私はこんなことを彼女に伝えてあげべきなのかもしれない。

貴女をお姉ちゃんって呼んでいい？

これだけで終わりだ。

きっと彼女は私の望んだとおりのお姉ちゃんになってくれる。

きっと彼女も喜んでお姉ちゃんになることを受け入れてくれる。

でも本当にそれでいいのだろうか？

私は悩んでいた。

……いや、悩んでいると思いたかった。

(最低だ。私……)

彼女のために悩んでいると思えば、私はどんな選択をしようが彼女のためにした選択なんだと逃げる事が出来る。

それが私の欲望を叶えるものであっても。

(……ごめんね、お姉ちゃん。私が選んだものは間違いなのかもしれない。それでも、許してくれると、嬉しいな?)

そして私は一つの選択した……

「あの、リリース副隊長？ お話を聞いて」

「……って、呼んで」

「えっ？」

「リリースって、呼んで。その代わりに私も、お姉ちゃんって呼ぶから。ただしこの部屋にいる時はだけど」

「……わかった。リリース、ありがとう」

「こちらこそ、ありがとう。お姉ちゃんになってくれて……」

……この関係は、歪んでいるものなのかもしれない。

それでも私は後悔しない。

いつまでもこの関係を続けていきたいと今は思っている。

もしもこんな関係が終わる時がくるとすれば、それは私たち以外の誰かがこのことについて知った時だろう。

そうならばもしかしたら私たちの見る目が変わってしまうかもしれない。

彼女はわからないが私はそんなの耐えられそうにない。

だからこそ、「この部屋にいる時は」などと伝えた。

確実に関係を、続けていくために……

「お姉ちゃん。もう一度だけ言うけど、この部屋にいる時は、この呼び方だからね？」

「うん、わかったよ。それより話し方はこれで変じゃない？」

「それで、大丈夫。気にしないで」

それから私たちは他愛無い話をした。

本当にどうでもいいことばかりを話した。

でもとても楽しかった。

まるで本当の姉妹のようだった。

これからは私の部屋にいる時は、こんな気持ちでいられることが多くなるんだと思うと、嬉しいと感じた。

……だが、何故なのだろう？

少しだけ胸が痛む。

嬉しいはずなのに少し気分が晴れない。

どうしてなのだろう？

(……なんなの、これ？ なんなの、この気持ち？)

僅かだけど、確実にある変な引っ掛かり。

それが何であるかはわからなかった。

結局それからアリエスさん……いや、“お姉ちゃん”と話してもその感じが無くなることはなかった。

そしてその感じは何なのか、どうして感じるのかもわかることはなかった……

第十三話（後書き）

なんとか前回よりは早く投稿は出来ました。

ですが大学が忙しいのもあって、以前と比べるとペースが落ちてますがこれからはこれぐらいのペースで投稿していきたいと思います。

今回の話では前回から出てきたアリエスとリリスが、まさかの関係になっていますが、この展開どうでしょうか？

少し自分の趣味もあってこういう変わった関係にしてみました。

正直、理解していただけるか心配です……

では、今回もここらへんで終わりを迎えることにします。

次回、第十四話をお楽しみに〜

第十四話

「また、ここに来て。約束だよ、お姉ちゃん？」

「わかってるよ。じゃあね、リリース」

用事があるからという理由から、お姉ちゃんは私に一言を告げて戻って行った。

先程までであった賑やかさは今の私の部屋にはなく、ただ静けさのみがあった。

だがそんなものは、とあるたった一言により消え去り、代わりに別の空気がまとうことになった。

『マスター……お話があります』

……何を話したいのかなんてわかってるけど、私はあえて何も言わなかった。

『先程のあれは、何ですか？』

「……あれって、何？」

『……質問を変えます。何故あのような関係を望んだのですか？』

いたって冷静に聞こえるが、長年使ってきた愛機だからこそわかる。

この子は怒っている。

それがわかったところで、私にはただ正直に伝えるしかなかった。

「お姉ちゃんに似ていたから、それが一番の理由かな」

『っ！？ ふざけないでください！！』

エターナルパルスの怒鳴り声。

長年一緒にいて、聞いたのは初めてだった。

つまりこの子はそれほど怒りを感じており、それだけの怒りを感じさせるほどのことを私はやってしまったということなのだろう。

『マスターの過去は辛いものだったのかもしれない。ですが、こんなことをしていい理由にはなりません！』

「……………うん。そうだろうね」

「わかっているのなら、何故なのですか！？」

「……………だって、好きだったの。お姉ちゃんは大切な人だった。そのお姉ちゃんと同じとも言えるぐらい瓜二つの人と出会えた。だからこの関係を臨んだ」

『その結果、アリエス・エスベラントという人の存在を消してしまふことになるかもしれないのですよ？それが正しいと、思っているの、ですか？』

胸が苦しい。

とても苦しい。

それは何故か？

答えなんて簡単だ。

私は罪悪感を感じているから。

けれど

「……………どうして？」

間違いであろうが、身勝手だろうが、一度でも芽生えた思いが簡単に消せるはずなんかない。

「どうして、駄目なの……………？」

『マスター？』

「どうして、望んじゃいけないの？ 理不尽に死んでしまったお姉ちゃんの代わりを、どうしてあの人に望んじゃいけないの！？」

『彼女の存在を、否定してしまうことだからです。それが正しいな
ど』

「だからあの人に、まだ孤独を味わって生きると言っの！？」

『そ、それは……………』

「やっぱり、何もわかってない！ 貴女に私たちのことなんか、わかるはずがない！！ 機械である貴女に！」

『……………』

……………口走ってから気付いた。

自分の言葉の意味に。

……………沈黙されたから気付いた。

この子がどれだけが傷ついていたのか。

……………そして最後に気付いた。

自分はどうしようもなく愚かだということに。

「あつ……………ご、ごめん、なさい。こんなこと……………言っ、つもりじゃ

『……………マスター。あの』

この子は何か言おうとしていたが、私は部屋から逃げ出した。

行くあてなんてない。

とにかく走った。

そしてたどり着いたのが、近くにある公園だった。

ただでさえ小さくて人気もなく、さらに夕方であるからか辺りには

人がいない。

一人になりたかったから、丁度良かった。

(……私、最低だ)

ベンチに座り、最初に自己嫌悪をした。

自分の勝手な思いを叶えるために、本気で私のことを心配してくれた人を利用した。

それを間違っていると言ってくれた子を、自分の容赦のない言葉で傷つけた。

これらに対し私は、どうしようもなく自分自身に嫌悪感を抱いた。

そして何よりこんなことになってしまった、自分の心の弱さが嫌だった……

「ここで何してるの?」

横から声が聞こえ振り向いてみると、そこには良く知ってる人がいた。

「フエイト……」

彼女は心配するような感じで私のことを見ていた。

そんな表情で見るということは、今の私は一目でわかるぐらい元気がないように見えるのかもしれない。

「何か、あつたの？」

「なんでもないから、気にしないで」

咄嗟に私はそう返していた。

「……何か、あつたんだね？」

訪ねてはいるが、その言葉には確信を持っているような感じがした。

「本当に、なんでもない」

「……本当になんでもなかったら、泣いたりはしないとしよう」

私が、泣いてる？

そんなことない。

私は泣いてなんか……

その時、頬に何かが流れてることに気付いた。

手で触ってみると、それは液体だった。

不思議なことに、その液体は私の眼から流れていた。

「どう、して……泣いてるん、だろう？」

その現実を認めた時、とても悲しかった。

何に対してなのかはわからない。

でも悲しくて、涙も止まらなかった。

「……話したくないなら聞かない。でも泣いてる友達を放ってはおけないから、これぐらいならいいよね？」

そう言うとフェイトは、慰めるかのように私を抱きしめた。

私は我慢が出来ず、フェイトの胸の中で思いつきり泣いた。

こんなに泣き虫だったのかって自分でも驚くぐらい泣いた。

泣いた分だけ少しずつ心が晴れていくような感じがした。

そして結構な時間がたち、私はようやく泣きやんだ。

多分、今の私は眼が赤く、泣いたあともあって酷い顔をしていると思う。

でも少なくともこの公園に来た時よりは、気分は晴れた。

「ありがとう、フェイト」

「私は何もしてないよ。ただ抱きしめてあげただけ」

「それでも、ありがとう」

「もしまた何かあって、悩んでいたら私のところに来て。相談にはのってあげるよ」

「……本当に、ありがとう」

三度のお礼を伝えたあと、私はフェイトの別れを告げ自分の部屋に戻ることにした。

傷つけたら謝る。

そんな当然のことを私は出来ず、逃げ出してしまった。

そのことも含めあの子に謝らないといけない。

その後は何を話せばいいのかは考えていない。

そもそも許してもらえないかもしれない。

だからと言って逃げていたって何かが変わるわけじゃない。

だったら逃げないで進まないと……

私は心にそう誓い、少し急ぎ足で部屋へと向かった。

そして部屋に着いた私は覚悟を決めドアを開けた。

入ってすぐに私はまた何かを言われると思っていた。

また自分がしたことは間違っていると言われると思っていた。

だからこそ……

『お帰りなさい。マスター』

いつも通りの優しさを感じる声に、つい茫然としてしまった。

『どうかしましたか？』

「えっと……その……」

いつもと全く変わらないその態度に、私は動揺してしまった。

どうして何もさっきのことを言わないのかわからなかった。

そんな私の迷いに気付いたのか、エターナルパルスから話し始めた。

『……まず最初に私から言わせてください』

「……なに？」

「すみませんでした。マスターの気持ちを理解しようともせず、あのようなことを言ってしまった……」

全くもって予想外の言葉だった。

てっきりまた、『マスターは間違っています』とでも言われるのか
と思った。

それにしても何故この子が謝っているのだろうか？

むしろ私は非難されてもおかしくないはずなのに。

『やはり、許しては頂けませんか？』

私が黙っていたことを怒っているからとも思ったのか、そんなことを言い始めたがそれは誤解だった。

「許すも何も、怒ってなんかいない。むしろ私が酷いことを言ったのだから謝るのは私の方。貴女が謝る必要なんてない」

『それは違います。どのような理由であれ、マスターである貴女の心を理解をしようとしなかった。それは許されることではありません。何を言われても、仕方のないことです』

「それこそ間違ってる。どんな理由があっても、酷いことを言っていないはずがない。だから私が貴女に謝るのは当然のこと」

『それを言うならば、最初の私の言葉がマスターを傷つけ追い詰めてしまった。原因は私にあります。マスターが謝る必要などありません』

「でも、貴女の言葉を私のことを思っていてくれたこと。それぐらいは、わかってる。なのにそれを認めてあげることができなかった私は、謝ってもらおう資格なんかない……」

『……そのような資格を、誰が必要だと言ったのですか？』

その口調はさつき私が説教された時の最初のものと似ていた。

ただ、そこから感じられるものは怒りとは違った。

『資格なんて、必要ない。私はマスターに、“謝りたい”という思いを抱いているだけです。なのに何故その思いをうけつとくれないんですか？』

「……だって私は、酷いことを……」

『それは、お互い様です。私もマスターを追い詰めてしまうようなことを、言ってしまったのですから……』

「だから、その原因は私にあるの。なのに貴女が謝る必要なんて……」

互いにどちらも譲らず、同じやりとりを私たちは繰り返していた。

『……強情です。マスターは』

「今の貴女に言われたくない……」

それが何度か続いた後、こんな一言を言いあつたのをきっかけに私たちは急に笑い出してしまった。

「あはは！ 急に笑ったりしてどうしたの？」

『ふふ。その台詞はマスターにお返しします』

「なんだか何度も同じことを言い会ってたら、急に可笑しくなって」

『私も、同じです』

「似た者同士だね。私たち」

『そうですね。先程はあんなにも険悪な空気でしたのに』

「あつ！もしかしてそれがいつのまにか、ただの意地の張り合いみたいになったから、可笑しくなったかな？」

『そうかも、しれませんね』

気付けば私たちは、いつもと何一つ変わらない様子で会話していた。それにしても、こんなにも簡単にいつもに戻るなら、さっき私があれだけ悩んでいたのは何だったのだろう？

……悩んでいた自分が、ちょっと馬鹿らしく思えてしまった。

まあでも、いつもと同じ感じに戻れたのだから、とりあえず良かったと思うことにする。

さて、これで全部解決した。そうであれば良かったのだが、そういうわけではない。

むしろ一番の問題は何も解決はしていない。

そのことについて話さなければならなかった。

「ねえ、エターナルパルス？」

『何でしょう？』

「まず最初に、私たちはお互いに相手を傷つけてしまったと思うてる。だからまず、私は謝るね。ごめん……」

『いえ、大丈夫です。私の方こそ、すみませんでした……』

「私も、大丈夫だから。それで次に、聞きたいことがあるんだけど、いい？」

『はい、何でしょうか？』

「貴女はどう思ってる？ 私と、あの人の関係を……」

『………認めては、いません』

やや長い沈黙のあと、はっきりとそう告げていた。

「……ごめん」

『何故、マスターが謝っているのですか？』

「認められなくても、私は今の関係をやめるつもりはない。だから、謝った」

『……理由をお聞きしても、よろしいですか？』

少しだけ躊躇った。

理由を言いたくなかったからではない。

話したあと、どんな反応をするかを考えてしまつたら、すぐに言葉が出てこなかったのだ。

でも、このまま黙っているわけにもいかなかった。

私は少し覚悟を決め話し始めた。

「……あの人が、アリエスさんが、お姉ちゃんに似てたから。それが理由。これはもう話したかもしれないけど」

「それだけ、ですか？」

「それが一番大事なの。他の誰よりもお姉ちゃんに似ている。まるで本人であるかのように。そんな事実が……」

「それは、何故ですか？」

「作ることが出来なかった思い出を、作ることが出来るかもしれないから。それが答え」

「……例えどんなに似ているとしても、彼女はマスターの姉ではありません。ですから、マスターの考えている、姉との思い出も作ることには出来ません」

「……わかってる。そんなこと」

当たり前だ。

どんなに似ているとしても、人は他人と同じにはなれない。

だからアリエスさんにお姉ちゃんとの思い出を作ること望んでも、出来あがるのは、お姉ちゃんの真似をしているアリエスさんの思い出だ。

似ているものが出来たとしても、決して本当のお姉ちゃんとの思い出なんか出来るはずがない。

でも私は

「それでも、いいの。家族との思い出ってこんな感じなのかなって、曖昧なものでもわかればそれだけで充分」

こんな思いを持っている。

だから望むのだ。

『……それが、マスターが関係を望む理由なのですね？』

「うん。でも、勘違いしないで。私は自分を正当化するつもりはない。どんな理由が、思いが、あったとしても間違っていることをしていることは事実だから」

『間違いだと理解しているのにも関わらず、やめるつもりはないのですね？』

「……ないよ」

『……マスターの言い分は理解しました。ですが私は、やはり認めることは出来ません』

「逆だよ。認めちゃダメ。だって、間違っているんだから。むしろ、やめさせるぐらいの気持ちでいいよ」と

『……私は、やめさせるつもりはありません』

予想外だった。

そんなことを言われるとは。

「っ……どう、して?」

『マスターお話を聞いて思ったからです。本物ではなくても、家族との思い出を作りたいという思いを、完全に否定してしまうことは正しいのかと』

「……それで?」

『ですから信じてみることにしました。マスターは時が来れば自分から辞めてもらえる……』

「裏切るかも、しれない」

『その時は私も、手段は選ばないつもりです。それまでは、信じます』

……本当にこの子は優しい。

こんな自分勝手な私に、時間をくれると言ったのだ。

もちろん多少の否定は覚悟するべきだろう。

だとしてもあれだけ認めないと言ったのに、私を信じて時間をくれると言った。

感謝の念より、この子の優しさに申し訳ないという思いでいっぱいだった。

なのに私は

「……………ありがとう」

お礼を言ってしまった。

つまりこの子がくれたの有限の時間を、もらうことに決めてしまった。

この子に申し訳ないと言う気持ちがあるのなら、受け取るべきじゃなかった。

むしろこんなことを伝えるべきだった。

ごめん。そこまで私のことを思ってくれてるなら、その時間は受け取れないよ

……………にもかかわらず私は、欲望に勝てず、優しさに甘えてしまった。

(本当に私って、自分勝手……………)

アリエスさんのことを“お姉ちゃん”として見れることに嬉しさはある。

(でも、本当にいいのだろうか?)

そんな思いもある。

……今更になってこんな疑問を抱くなんて、私は何をしているのだらう。

『マスター。どうかしましたか?』

急に黙ったことが不思議だったのか、問いかけをされた。

「なんでもない。気にしないで」

それに対し私は平静を保ちつつ、答えを返した。

『そうですか。どうやら、気のせいのようなようですね』

何が気のせいなのか?

なんとなく聞くのを私は躊躇った。

それから私たちは、いつものような話をし始めた。

真面目な話はもう終わったとばかりに、どうでもいいような雑談ばかりをしていた。

その最中に、私は何故か少し胸が痛んだ。

それはすぐに治まったが、今度はこの子と話すことに少しだけ変な

感じがした。

話すのが嫌だっただけではないのだが、何故か躊躇ってしまった。

結局、それからそこそこの時間をはなしていたが、この妙な感じはなくならなかった。

そしてこの日は境に私は理由はわからないが、自分のことがだんだんと好きになれなくなっていった……

第十四話（後書き）

長々とお待たせしてすみませんでした！

言い訳の定番みたいなことをいいますが、色々と忙しかったんです。本当に、申し訳ございません……

さて今回の話ですが、リリースが不安定になってきてますね。

まあ、この不安定な感じがこの後どう関係あるのか楽しみに待っててください。

特に書くこともないので、ここらへん終わりにします。

第十五話をお楽しみに〜

第十五話（前書き）

長々とお待たせしてすみませんでした。

あと、今回初めてリリース以外の人物の視点で書いてある場所があります。

第十五話

「……疲れた」

この一言だけではどれだけ疲れているかわからないだろう。

だから簡単に説明するならば、歩くだけでも辛いぐらいだ。

どうしてそんなことになっているか、その理由は寝不足が原因としか言えない。

なさけないと自分でも思うが、事実なのだから仕方がない。

どうしてこうなってしまったのかはわからないが、いつからこうなってしまったのかという問いには答えることが出来る。

それは二週間前……自分を好きになれないなんて感じてしまったあの日から始まった。

前触れもなく、急に寝つきが酷く悪くなる時がある。

具体的な原因なんて知らない。ただ寝つけないという事実だけが、私を襲い始めた。

訓練などが厳しかった日なんか、疲れが抜けないのだからたまったもんじゃない。

それでも毎日がそうだというわけではないのは救いなのかもしれないが、そんなのが三週間も続いていれば、限界が来るのも当然のこ

とだった。

『マスター、大丈夫でしょうか？』

「だいじょうぶ、じゃないと思う……今日、ちゃんと休めないと、本当にまずそう……」

私が言ってることは大袈裟ではなかった。

昨日まではなんとかもってはきたが、流石に今日は本当に調子が悪い。

ただでさえ新部隊の訓練は易しくはない。

さらには私の副隊長という立場上、自分の訓練もしながらも部隊の人達に出来る限りの指導もいてあげなければならない。

こんなことを無理して続けていけば、下手をすれば次の訓練の時にも倒れかねない。

「なにか、いい方法ない？」

とにかくこの悩みを解決できるきっかけだけでも欲しかった。

『一つだけ、考えはありますが……』

この子にしてはめずらしく歯切れが悪い。

なんとなく言わんとしてることがわかってしまった。

「誰かに……シャルルさんあたりに相談するってと……」

『……その通りです』

まあ、予想できたことだった。

体調に関する悩みを、医療の心得があるものに話してみるのは当然のことだ。

ならば何故今までしなかったのか？ その理由は、二つある。

一つ目の理由が、心配をかけるのが嫌だったから……

少なくともこの三週間、辛かったけど全力で頑張ってきた。

その結果、私を目指して頑張ると言ってくれた人もいる。

そんな人たちに自分は本当は体調が悪いなんて気付かれない。心配をかけたくない。

もちろん誰かに相談したからと言って、大勢の人に知られるわけではないだろうが、偶然なんて良くあること。

何かがきっかけで、もしかしたらということもある。

だから今まで黙っていた。

……考え過ぎ、と言われるかもしれない。

でもそこまで考えるのには理由がある。

それこそが二つ目の理由。

自分でも身勝手で酷いと思うけど、私は怖かった。

エターナルパルスにあれだけ自分の思いをぶつけておきながら、いざ他の人に知られるかもと思うと、怖いと思ってしまう。

もし無理やりにもやめさせられたら……そんなことを想像すると怖いと思ってしまうのだった。

だからってこのまま何もしなかったら、早ければ明日にでも私は限界をむかえる。

その時になって何もしなかったことを後悔したって手遅れだ。

動くなら今こそが最後の機会だろう。

わかっているはずなのに、私はまだ動けないでいた。

『マスター。お気持ちは察しますが、これ以上は……』

「わかっている」

嘘だ。本当にわかっているなら迷う必要はない

『でしたらすぐにでも……』

「……考えがあるの。だからまだ少し待って」

嘘だ。そんなものがあるなら、今こんな状態なはずがない

『本当ですか……？』

「信じて。大丈夫だから」

嘘だ。嘘だ。嘘だ

本当はただ逃げているだけ

ありえるかもしれない現実から

子供みたいに怖がって逃げているだけ

自分のことを誰よりも気にかけてくれる自分の愛機パートナーにまで
嘘をついて、どこまで
も身勝手に逃げているだけ

本当に最低

何処からか私を責めるそんな声が聞こえた気がした。

……いや、もしかしたら私の中にもう一人いてその人が言った言葉なのかもしれない。

(はぁ……なに、考えてるんだろう)

私は自分のあまりに馬鹿らしい考えを後悔した。

そんなことを考えるぐらいなら、少しでも解決策を

「……あつ」

あつた。

『どうかしましたか、マスター？』

「……何でもない」

この子には言えないけど、方法があつた。

確実とは言えないけど、可能性はあるはず。

どうせ今の私では、いくら時間が経たとうが悩んで終わってしまっ
そう。

だったらこれに賭けてみるのもいいかもしれない。

『では、マスター。大丈夫だと、信じてと言うのでしたら私は何も

しません。貴女を信じます。ですが 』

「わかってる。これでも無理だったら、その時は 」

私の気持ちなんて関係ない。この子は手段を選ばないだろう。

『そうですか。理解しておられるなら結構です』

「……ありがとう」

具体的に私はどうするのか話してすらいないのに、この子は何も知ろうとはしなかった。

ただ信じてくれた。

そのことに対し私をお礼を言った。

『どづいたしまして』

(……どういたしましたか。ここまで信じられているなら、裏切るような真似はしちゃいけないな)

心の中でそう思った。

ふと時間を見ると、まだ6時前だった。

そして今の私には色々な意味で都合なことに、めずらしく眠気が襲ってきてすぐにでも寝れそうだった。

『めずらしいですね。今でしたらお休みになれるのでは？』

欠伸をしたところを見たからかこの子もこんなことを言ってきた。

「うん。ちょっと横になる」

『わかりました。適当な時間になったら起こします』

「お願いするよ」

そう言って私はすぐさま寢床について瞼を閉じた。

とりあえずここで上手くいかなければ意味がない。

なんたつて私の解決策とは、“眠って夢を見る。”

そんな方法なのだから。

(心配はしなくても、大丈夫だったみたい)

少しずつ意識が落ちていく中、心の中でそう呟いた……

瞼を開くと見覚えのある場所に私はいた。

白い世界。

何も無い孤独を感じさせる世界。

ここに来るのは二回目だ。

なんとか無事ここに来ることが出来て私は少し安心していた。

間もなくしてまた見覚えのあるものが見えた。

そう、以前もここで出会ったあの人だ。

ただ前とは違って今度は最初から彼女の姿ははっきりと見えていた。

「お久しぶりね」

「……久しぶり」

「あら？ やっぱり違和感を感じているみたいね？」

……それは当然だと思う。

自分と同じ顔……自分と同じ姿の人が目の前にいれば、変な感じがしたりするものだと思う。

「まあ、少しずつ慣れてくれれば嬉しいわ」

「……努力はする」

「ええ、お願いね。さて、貴女の知りたいこと、そろそろ教えた方がいいかしら？」

……全くと言えば嘘だが、特別驚くことはなかった。

確信はないけどこの人は私のことなら全て知っているような気がしていた。

そう思うのもこの人に会ってから言葉では上手く言えないが、私とこの人は繋がっているような感じがずつとしていたからだ。

気のせいだろうかとは思っていたけど、どうやらあなたが間違ってもいなかったようだ。

「どうしてわかってるの？」

だからこの質問は疑問の為ではなく確認の為のものだ。

私の考えは本当にあっているかを確かめるための。

「貴女もうすうす感じているはずよ。私との繋がりをね」

……当たっていたことが証明された瞬間だった。

「やっぱりこの感じは、貴女と繋がっているからなの？」

「そういふことよ」

「……でもどうして、貴女に私のことが伝わるの？ 私に貴女のこととは何も伝わってこないのに」

「貴女はこの繋がりをなんとなく程度にしか感じ取れていないからよ。もっと具体的に繋がりをイメージしないといけないわ」

（そう言われても具体的なイメージなんてよく、わからない。どう

すればいいのだろう?)

「そうね……簡単な方法としては相手と気持ちを共有したいと望むことかしら?」

「えっ? 声、出てた?」

突然の返答に少し戸惑った。

「いえ、出ていなかったわ。私は心の中の声に答えただけよ」

「……それも繋がっているから出来ること?」

「そうよ」

便利なものだと思う、けど自分の思うことが伝わっていると思うと少し……いや、かなり恥ずかしい。

自分の心を見られているようなものなのだから。

(それはそうとして、気持ちを共有するってどういうこと?)

「難しく考える必要はないわ。楽しい時は一緒に楽しみ、悲しい時には一緒に悲しむ。そんな簡単なことでいいのよ」

……お願いだから、心の中で呟いていることに返答しないでほしい。

……まあ、気にしないようにしよう。

それより確かに簡単ではある。

「でも、それは……」

「貴女の思うことはわかるわ。方法は簡単でも、こんな得体のしれない私にそこまで心を許すことに抵抗を感じているのよね？」

「……ごめんなさい」

「謝る必要はないわ。貴女は間違っていないもの。だから貴女が嫌だと思っなら、この繋がりを切ってもいいわ」

そう話している時にこの人の表情が少し寂しそうに見えたのは気のせいではないと思う。

だから、私は

「そこまでしなくてもいい。別に嫌じゃないから」

嘘ではない。本当に嫌ではないのだ。

「いいのかしら？ 気付かぬうちに貴女の心の中を覗かれるかもしれないのよ？」

「本当にそんなことをするつもりなら、わざわざ話したりはしない」

「油断させる為、かもしれないわ」

「貴女はそんなことしない。だって、貴女は優しいから」

特別そう思えるようなことをされた覚えはないけれど、それでもな

んとなくわかる。

この人は優しい女性ヒトだと。

これは繋がってるからわかるのかもしれない。

「……そう。ありがとうと言っておくわ」

「どういたしまして」

その時、空間が少し歪んだ。

どうやら時間はあまりないようだ。

「終わりが近づいてるようね」

「そう、みたい」

「なら手っ取り早く話すわね」

「お願い」

ここまで来て本題に入れず終わったなんて洒落にならない。

「貴女の不眠症の原因は、自分を追い詰めてしまっているからよ。知らないうちに自分自身に無理をさせたりしていないかしら？」

……心当たりは、ある。

自分に好きになれないなんて思ったあの時からだろう。

自分では気付いていなかったけど、追い詰めていたのかもしれない。
「なるほど、そんなことを思っていたのね。……全く馬鹿なんだから」

「どうやらまた心の中を知られたようだ。」

でもそれより聞き捨てならないことがあった。

「ひ、酷い！ どうして私が馬鹿なの？」

「まだ気付かないの？ 貴女は自分が好きになれないと感じた原因はどうして？」

「それは……自分勝手なことばかりかしてる酷い女だから」

「それって、間違っていることかしら？」

「どういふこと？」

「人は誰でも個人差はあれど自分勝手なものよ。他人に何を言われようと、自分はこれをしたからする。そんな考えを持つことは間違っていないわ。貴女のした選択も同じ」

「で、でも……」

「それに貴女がした選択は、自分の為だけのものじゃないですよ。ある人をおもったの思いやりを持ったものでもあったはずよ」

そんな風に考えたことなんてなかった。

心が弱いからあの人を利用してしまった。

心が弱いから愛機パートナーに甘えてしまった。

だから自分は最低なんだと思ってしまった。

でもこの人は、そんな私を肯定してくれた。

間違っていないと言ってくれた。

それが嬉しかった。

「これが最後になるけれど、貴女は私に優しいと言ってくれた。自分を本当に好きではない人は、他人をを思いやることなんか出来ないわ」

「……ありがとう」

「何に対して？」

「色々と、かな」

「そう。なら、どういたしましてと答えておくわ」

そしてどうやら終わりの時が来たようだ。

少しずつ体が消え始め動かすことはおろか、声ですら出すことは不可能だった。

そして意識が完全に落ちる最後の瞬間、優しげな声が聞こえた。

「……また、あいましょう……」

眼をさますといつもと同じ天井が見えた。

『お目覚めになられたようですね、マスター』

「うん。よく寝れた」

時間を見てみると8時前だった。

思っていたより眠っていたようだ。

『お体の方は、どうでしょうか？』

「うん、大丈夫。それにちよつといい夢も見れて、気分もいい。さつきまでとは全然違う感じみたい」

『そうですか。不眠症の方も大丈夫なのでしょう？』

「わからないけど、不思議と今までみたいに怖くはないかな？」

『治っているといいですね』

「そう、だね」

夢であの人に会えて良かった。

色々と心に引っ掛かっていたもの、悩んでいたものも全部ではないが晴らすことができた。

自分に好きになれないなんてことを、少なからず思わなくなりました。

今度会う時があったら、改めてお礼を言おうとしよう。

『マスター。時間は少し遅いですが、夕飯にしてはどうでしょう？
空腹ではないですか？』

「うん、何か食べにいく」

『はい』

そうしてかなり遅めの夕飯を私たちは食べに行くため、部屋を出たのだった……

?????side

……あの子が消えた。

正確には夢から覚めた。

何度もこんなところをこれから先も見ることになるだろう。

考えると心が重くなる。

「それにしても、優しいなんて言われるとはね。……私はそんな言葉に向けてもらえる資格なんてないのに」

彼女は嘘を言っただけはなかった。

眼を見ればそれぐらいのことはわかる。

確信なんかないはずなのに、よくもそこまで……

「ねえ、リリース。私は優しくなんかないのよ」

本人の前では、そう言えなかった。

嬉しかったから。

誰でもない、あの子に優しいと言われたのが嬉しかったから。

自分であの子の言葉を否定するのが嫌だったから。

「はあ……私も、弱いわね。でも、しょうがないわ」

あの子は私にとっての全てなのだから。

だから

「リリース。今度こそ、貴女を守って見せるわ。絶対に」

この場にはいないあの子に向けて、そう誓うのだった……

第十五話（後書き）

みなさんおひさしぶりです。高風です。

約二カ月ほど空いてしまいましたが、なんとか投稿することが出来ました。

楽しみにしている人には申し訳ないと思いますが、これから先も投稿は遅いかもれません。

ご理解していただけると助かります。

今回の話ですが、再び登場の夢の中での女性ですね。

最後はどうやらリリースのことを知っているような口調でしたが、彼女は何者なのでしょう？

気になる方はこれから先もこの作品を読んで頂けると嬉しいです。

また前書きでも書きましたが、最後は初めてこの女性視点で書いてみました。

……あまりリリースの時と書き方が変わっていないのですが、本当にこれでいいのでしょうか？

少し不安です……

では今回はここらへんで。

第十六話をお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3213o/>

魔法少女リリカルなのは～過去に縛られし少女～

2011年9月29日19時40分発行